

Title	近世ベンガルにおける旅と経済
Sub Title	Travel and economy in early modern Bengal
Author	Mukherjee, Tilottama(Katakura, Shizuo) 片倉, 鎮郎(Kanda, Sayako) 神田, さやこ
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2016
Jtitle	三田学会雑誌 (Mita journal of economics). Vol.109, No.3 (2016. 10) ,p.425(31)- 470(76)
JaLC DOI	10.14991/001.20161001-0031
Abstract	<p>16世紀から18世紀にかけて多数のヨーロッパ人旅行者がベンガルを訪れ、同地域の都市やその経済的・政治的盛衰について貴重な報告を残している。旅行記は、初期には記述が貧弱であったが、ガンガー沿いの諸都市、ヨーロッパ各国東インド会社間の競争、そして増大するカルカッタの重要性についての報告を含む、より詳細なものになっていった。現地の人々は旅に出てもそれについてまったく記録を残さなかったが、その旅自体はベンガル経済には多大な影響を与えた。本稿は、外国人による旅行記を通じて都市や経済活動の変容を明らかにした上で、巡礼と定期市の分析から旅の経済的帰結について描きだすことを試みる。</p> <p>A number of European travellers visited Bengal in the sixteenth to the eighteenth century and left behind valuable accounts of the region's cities, changing economic and political fortunes. From early sparse descriptions, the travelogues would become much detailed, with reports of urban centres on the Ganges, rivalries between the European companies, and the growing importance of Calcutta. Domestic travellers left no accounts of their sojourns but had an immense impact on the economy of Bengal. This article attempts to chart the changing fortunes of urban centres, commercial activities, as glimpsed through these foreign travel writings and the economic consequences of travel as revealed by pilgrimages and fairs.</p>
Notes	特集：ベンガル社会経済史研究のフロンティア：植民地期を中心に
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20161001-0031">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20161001-0031</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 近世ベンガルにおける旅と経済

ティロットマ・ムカジ\*  
片倉鎮郎\*\*・神田さやこ (訳) \*\*\*

### Travel and Economy in Early Modern Bengal

Tilottama Mukherjee\*  
Translated by Shizuo Katakura\*\* and Sayako Kanda\*\*\*

**Abstract:** A number of European travellers visited Bengal in the sixteenth to the eighteenth century and left behind valuable accounts of the region's cities, changing economic and political fortunes. From early sparse descriptions, the travelogues would become much detailed, with reports of urban centres on the Ganges, rivalries between the European companies, and the growing importance of Calcutta. Domestic travellers left no accounts of their sojourns but had an immense impact on the economy of Bengal. This article attempts to chart the changing fortunes of urban centres, commercial activities, as glimpsed through these foreign travel writings and the economic consequences of travel as revealed by pilgrimages and fairs.

**Key words:** early modern Bengal, European traveller, marketplace, pilgrimage, travelogue

**JEL classifications:** N75, N95

- 
- \* ジャダプル大学歴史学部  
Department of History, Jadavpur University  
tmukherjee@history.jdvu.ac.in  
本稿作成に関し、慶應義塾経済学会、神田さやこ氏、Amit Bhattacharyya 氏、Raziuddin Aquil 氏に謝意を表したい。
- \*\* プネー大学歴史学部大学院  
Department of History, Savitribai Phule Pune University
- \*\*\* 慶應義塾大学経済学部  
Faculty of Economics, Keio University

地名などの固有名詞やその他必要な注記について、本特集号企画者（神田さやこ）が〔 〕内に示した。本稿に登場する地名はさまざまな綴りで英語表記され、読み方も言語によって異なるが、読者の混乱を避けるため、同一固有名詞は本稿を通じて同一のカタカナ表記で示した。

## 1 序論

数多くのヨーロッパ人旅行者が〔ベンガルを中心とする〕東部インドの都市や町を記述してきた。16世紀の旅行記が主として描いたのは、沿岸の主要都市、主に東南アジアとの大規模交易、そしてペルシア湾・紅海地域やインド亜大陸の他地域との一定規模の交易だった。かれらはあえて海岸線を越えて中に進もうとはしなかったようである。17世紀までに、旅行記は、地域についてのより広範囲の観察記録をともなう豊かなものになった。もはや沿岸部だけではなく内陸部が描かれるようになり、フグリ川／ガンガー沿いの中心的都市が列挙されるようになった。18世紀までには、旅行記は、より詳細になり、政治的な出来事やヨーロッパ各国東インド会社間の競争について多くのページが割かれるようになっていた。〔イギリス東インド会社（以下、EICと略）が拠点とした〕カルカッタは旅行者が必ず滞在する場所となった。たしかに、これらのヨーロッパ人旅行者たちはベンガル経済について多くの記述を残した。しかし、ベンガル経済に多大な利益をもたらしたのは、むしろ現地の旅人だったようである。本稿では、旅行記に東部インドの中心的都市の盛衰や交易がどのように記述され、そして、旅が経済にどのような影響を与えたかについて論じよう。後者については、巡礼と定期市のネットワークの検討を通じて明らかにしたい。

## 2 ヨーロッパからの旅行者

多くの研究者たちは以下のように論じてきた。「初期のイングランド人の旅行は大半が（明示的あるいは黙示的に）交易の名のもとにおこなわれ、この時期に出版された旅行記の大半には、著者や出版者の金儲けをしたいという欲望であれ、特定の事業への援助であれ、営利的な動機が刻印されている」と。テルシャー（Kate Teltscher）によれば、すべての旅行記の著者は何らかの形で、インドと将来的に交易ができるかどうかの調査に関わっていたため、かれらの著述は「信頼できる権威」のオーラをまとわねばならなかった。なぜなら、それらは交易の可能性を知るための実際的な情報源として機能し、商人の手引書の役割を果たすことを期待されていたからである（Teltscher 1995: 17）。旅行記集の予約者リストには多数の商人が含まれていたことから、テルシャーは、それを旅行記集と商業的<sup>ナショナル</sup>事業との関連を示唆するものと解釈している。テルシャーはこれらの著述の多くに民族の威信という感覚を読み取っている。旅行記には、きわめて似通った描写もあれば、対照的なものもある。記述の方法では、距離感を押しだすものもあれば、できるだけ奇矯さを減じようとしているものもあった。研究者の中には以下のように論じる者もいる。多様性と信じがたいほどの奇矯さは、17世紀にイングランド人が記述したインド旅行記の特色であり（Nayar 2005: 213–38）、それらには豊かな風景と『地勢』が描写され、それぞれの場所に特有の物質的／商業的特徴にとく

に注意が払われている」。そして、最後に、まさに同じ風景が「やりすぎ」に変容するというのである。近年の研究では、17世紀の旅行記に特徴的な「比喩と修辭的構造こそが、植民地期の18世紀インドに関する記述と明らかに区別される点である」と指摘されている(Nayar 2003: 357-94)。17世紀旅行記には、特異なものや広大な世界への好奇心をかきたてる要素と同時に、乗り越えるべき困難や障壁についても描写されているのである。

本稿では、ベンガルに関する旅行者の観察記録をいくつか取りあげる。以下で論じるのは、相異なる旅行記の一群である。英語で書かれたもの、フランス語やオランダ語で書かれたのちに英語に翻訳されたもの、まったく訳されなかったものが含まれる。まず、こうしたベンガルを訪れた旅行者の記述に関して、以下の問いについて検討しよう。地域、その町々、そして交易の実態はどのように記されたのだろうか。そこには何が記述され、記録されたのだろうか。旅行記の著者がどのような目的でそれらのことを記述したのだろうか。そして、近世期を通じて描写されるイメージに変化があったのだろうか。この変化については、16世紀から18世紀の旅行記の小選集を用いよう。何らかの変化があればそこから描きだすことができるからである。ただし、本稿が依拠する旅行記の形式と論調はきわめて多様であり、しばしば無秩序に編集されていることを指摘しておきたい(Hulme and Youngs 2002)。

ベンガルについての記述、とくに初期のものは、<sup>ルート・マーチ</sup>旅次行軍の形をとる中で書かれた地図のようなものが多くみられた。エキゾチックでときに危険、ときに画趣をそそる自然の植物相と動物相が描写されていることもあったが、諸都市、それらの立地、もしあれば砦の存在、そして市場で手に入る主要な商品についての目録や一覧表が大部分を占めた。こうした記述は、旅人たちが、荷車の車輪が切り開き、他の旅人や先人たちの無数の足が踏み固めた道を歩いたのなら、あるいは同じ河川ルートを通ったのなら、主要都市に関する簡潔な基本情報を備えたすぐに役立つ便覧の役割を果たしたであろう。ただし、例外はあるものの、単なる基本情報にすぎなかったり、表面的な調査しかおこなわれていなかったり、描写が繰り返されているだけのものも多い。決して、未来の旅人や商人が、地域の商業的可能性を掘り起こし、事業戦略を練り、ひいては帝国でさえもイメージできるような高い潜在性を秘めた詳細なマニュアルではなかった。とはいえ、本稿後半でも多用するように、詳しい旅の経験を知り、国内における旅が経済に与えた影響について検討するためにはさまざまな異なる史料群に目を転じねばならない。

初期の記述にはあまり詳細に言及されていないが、ベンガルが17世紀により多くの旅行者の注目を集めたことは驚きではない。なぜなら、ムガル帝国とインド洋交易ネットワークがより緊密に統合されたからである。18世紀には、ヨーロッパ各国東インド会社が権力と莫大な利益を生む交易中心地をめぐる競争が激化したので、〔ヨーロッパからの〕旅がさらに活発になった。この時期を通じて、恐れを知らない旅行者たちは、どうやら自らが入念に記録した地域に好ましいイメージをもって立ち去ったようである。地域内の発展がこれらの旅行者の旅程を定め、逆に、かれらの旅が増えたこ

とは地域の商業的・政治的影響力の高まりを反映しているのであろう。そして、旅行記は〔インドが〕豊かな地域という概念を不朽のものとしたともいえるだろう。

本稿が対象とする数世紀の間に、旅の記録には諸々の変化がみられた。フィリップス (Kim M. Phillips) によれば、16 世紀初めまでに、インドに対するイメージは、驚嘆と奇怪を併せもつ一様な「インド」から、多様性と富に特徴づけられる一様ではない地域へと見方が変化していた (Phillips 2014)。情報と娯楽を求める読者層に応じた結果であり、かれらが自分たちの読みたいものを決めたということでもある (Phillips 2014: 2)。しかし、ベンガルに関する記述から考えると、近世の読者たちは明らかに、冒険活劇や危険に満ちた脱出劇よりも、文章化された地域情報に関心があったのである。もちろん、例外もある (例えば、修道士セバスチャン・マンリケ [の旅])。

ベンガルについて 16 世紀の旅行記が主に描いたのは、沿岸部の主要都市と大規模な交易である。ベンガルの交易は沿岸交易が中心であった。主な交易相手地域はマラッカをはじめとする東南アジア諸地域であり、それにペルシア湾・紅海地域やインド亜大陸の他地域がつづいた。さまざまな安価な商品が売買され、各地から多様な商人が集まった。初期の英語の旅行記には、未だヨーロッパ商人は登場しない。だが、16 世紀後半までに、ポルトガル人の存在が記されるようになる。旅行者たちは、沿岸地域に関する予備的な調査旅行をおこなっていたが、内陸部までは行かなかったようである。こうした旅行記には、概して、統治者たちには言及されるが、その住民や、かれらの宗教、服装などについての情報は含まれない。16 世紀には、旅行をそれ自体で楽しむ新たなタイプの旅行者も現れた。フィリップスは、ヴァルテマ (Ludovico di Varthema) をその事例として挙げて<sup>(1)</sup>いる。

ヴァルテマは 16 世紀初めに次のように書いた (Varthema 1863)。ベンガルという国は、穀物、「あらゆる種類の食肉」、砂糖、ショウガ、そして木綿の最も豊かな供給地であり、「世界のいかなる国」をも上回っている。ベンガルには、かれが会った中で最も富裕な商人たちもいた (Varthema 1863: 212)。木綿と絹を積んだ船 50 隻内外が世界中 (トルコ、シリア、ペルシア、アラビア、エチオピア、そしてインド) に送られる。巨大な宝石を扱う他地域から来た商人もいる。そして、かれは「ベンガル (Banghella)」を「暮らすには世界中で最高 [の場所] である」と述べた。バルボサ (Duarte Barbosa) は、ベンガル (Bengala) 王国には多くの町があり、多くの「異教徒」が住んでいると述べているが、誤ってそれをヴィジャヤナガル王国の政治的支配下にあると捉えた (Barbosa 2002: 135-48)。ムスリムは交易がおこなわれる海港に居住した。チッタゴン、〔ベンガル東部の〕シヨナルガオン (Sonargao)、〔ベンガル西部の〕シヨプトグラム (Satgao)、そして〔ベンガル中部の〕ゴウル (Gaur) などと同一視されるベンガルという都市は、「ムーア人」の王に統治され、「白人」のほか、各地からやってきた大商人兼船主が居住した。かれらはコロマンデル、マラッカ、スマトラ、ペグー、キャンベイ、そしてセイロンへと船を送る。綿花、サトウキビ、ショウガ、そしてヒハツ

---

(1) Phillips 2014: 58. ここでは Hammond 1963 が引用されている。

の畑が特記され、とても質が良い織物（色物）がかれら自身の消費用として、あるいはどこかで売  
るために織られ、さまざまな質の織物（生成り）や細糸の高級織物が大量に生産された。多種の果  
物も栽培され、ウマやウシの数も多い。バルボサは、宦官の中には富裕になり、大きな地所をもつ  
者もいたと述べている。同様のことはピレス（Tomé Pires）も記述している。服装についても描写  
されている。現地の人々が統治者の「歓心を買う」ために改宗していることや、海岸沿いにすべて  
の都市が立地していることも記録されている〔実際には沿岸部河港も含まれる〕。

ピレスによる16世紀初期（1512-1515年）の記述（Pires 2005）は、この地域に関するたいへん  
興味深い書きだしではじまる。「ベンガル人は偉大な商人であり、かつきわめて独立心が強く、交易  
するように育てられている。かれらは域外には出ない。すべての商人は不誠実である」。他の旅行者  
と同じく、ピレスもアジアの他地域や〔インド西海岸の〕チャウル、ダーボール、そしてゴアから来  
た商人の存在を特記している。きわめて高い生産力があること、食料品が廉価であることが記され、  
つづいて、かれが理解した王権について記されている。それによれば、強力な「ムーア人」戦士王  
によって統治され、支配階層はアピシニア人であるが、明らかにそれほど商業に協力的でなかった  
という。主な港は「ベンガル」市（ゴウル）であり、日干し煉瓦造りの王の居館があり、その他は  
椰子の葉の小屋である。ショプトグラム（Satgaon）がその次に重要で、富裕な商人がいる良い港市  
である。内陸部に強力に武装された要塞都市があるとも書かれている。この地域はマラッカと海路  
でつながっており、年に1〜2回、1隻の船が9万クルザード相当の商品を運ぶ。また、取り扱われ  
る各種商品が列挙され、<sup>カウリン</sup>貨を含む貨幣制度にも言及されている。ピレスによれば、ベンガルに向  
かう商人にとっては税が高いという難点があるものの、故郷では商品の価値がきわめて高く評価さ  
れ、また、少量の価値の高い品物だけを運ぶので、利ざやは十分に大きかったという（Pires 2005:  
88-95）。

フィッチ（Ralph Fitch）は、かれがいかにして北インドのアーグラからベンガルの「ショプト  
グラム（Satagam）」まで、180隻の小舟の船団を組み、塩、アヘン、<sup>トシ</sup>阿魏、鉛、絨毯その他の商品  
を積んでヤムナー川を下ったかを記述している（Fitch 2005）。アーグラから、大きな町であり、  
「大量の織物が作られる」バナーラス（Banaras）を訪れた。フィッチは、バナーラスが遠方の国々  
から巡礼者を惹きつけていると述べている（Fitch 2005: 54）。その後、パトナーから、綿花と織物  
の取引がおこなわれるターンダー（Tanda）を訪れた。アーグラからヤムナー川とガンガーを下  
り、〔ショプトグラムまで〕5ヶ月かかったが、もっと短期で移動できたらろうと述懐している。フウ  
グリについては、「ベンガル（Bengala）国においてポルトガル人が保持している場所である」と記  
し、ショプトグラム（Satagam）については以下のように記述した。

ムーア人の都市にしてはまずまずの都市で、あらゆるものが豊富である。ここベンガル（Bengala）  
では、毎日どこかでChandeauと呼ばれる大規模な市が開催され、人々は pericose と呼ばれる大

きな舟を数多く有しており、それに乗ってあちこちに行ってコメやたくさんの他のものを買う。この舟は漕いで進むための 24 ないし 26 の櫂を備えている。積載量は大きい、覆いはない。

主要な交易商品に関するリストに加えて<sup>(2)</sup>、「9 インチの耳をもつ人々」についての奇妙な記述やそれに対するフィッチの見解もある (Fitch 2005: 58-60)。

16 世紀末葉の記述、例えば、リンスホーテン (Jan Huyghen van Linschoten) のものには、ガンガーとベンガル (Bengalen) 王国についての観察がみられる (Linschoten 1997: 92)。かれによれば、「シヨプトグラム (Chatigan)」とそこの人々は「最も狡猾で不道徳であり……かれらは皆泥棒で、また女たちは売春婦である。もっともこの欠点はインド全土に共通で、どこも例外でない」(Linschoten 1997: 94)。こうした記述は、ある程度は、悪賢い、不正直、無気力、好色などといったインドの人々に対する後の帝国主義者がもったイメージや観念の先駆的な形といえるだろう。しかし、それは、交渉や取引の中で悪化していったかれら自身の苛立ちを表したものであったともいえないか。軽蔑に値するような特性をもっていることこそが、何とも羨ましいことに、かれらを手強い商売敵にしていたのであるから。他の旅行者と同様に、リンスホーテンも豊富な主要産品、とくにコメの安価なことに衝撃を受けた。さまざまな種類のきわめて上質の綿織物が広く取引され、それはインド各地やポルトガルを含む世界各地で、高く評価されていた。ポルトガル人が商売する様子も記されている。

17 世紀までには、旅行記は地域についてのより広範な記述を含む豊かなものになっていた。もはや海岸部にとどまらず、内陸部も描かれ、フグリ／ガンガー沿いの諸都市が含まれるようになった。主要商品一覧表は、とても詳細に、時折とても魅力的に作られた。これはこの 3 世紀を通じて変わらない特徴であった。一覧表には、今やタバコやパイナップルのような新たな世界的作物も含まれた。このことは、インド亜大陸のみにとどまらず、諸経済と交易がこれまで以上に相互に密接につながるといって、近世世界の大規模な変化を物語っている。旅行者の安全を保障するなど諸国家もこうした変化を助長していたようである。ベンガルの国家は、自らが有する資源をより効果的に用いていた。金属貨幣についても頻繁に言及されている。外国人商人に関する描写も、アラブ人、ペルシア人などにとどまらず、ヨーロッパ人、主としてオランダ人、イングランド人、フランス人 (より小さい扱いでポルトガル人も)、そしてかれらの商館におよんだ。地元の市場の存在が記述され、大規模な域内交易があったことも示唆される。常に詳しく述べられているわけではないが、旅行者たちは、情報を得るため、そしておそらくは物理的な支援を受けるため、ヨーロッパ各国東インド会社、民間商人、宗教集団のネットワークを利用しえただろう。同盟者／庇護者／顧客などのネッ

---

(2) テルシャーは、フィッチの記録が商業用の参考資料として利用されていると指摘している (Teltscher 1995: 14)。

トワークを築きあげ、利用することは、商業の世界と政治の世界の双方に備わった特質でもある。

マーシャル (John Marshall) のベンガルに関する観察記録も同様の特徴をもっていた (Marshall 1927)。1668 年頃に執筆された覚書は、この時期の他の旅行記にしばしばみられるように、地名と各地点間の距離を記録しつつ、日々の旅次を項目に立てる形式をとった。より長い記述に値した内容もあったのだろう。例を挙げよう (Marshall 1927: 64-65)。

3月2日。ジャハーナーバード (Jaunabad) へ。川の近く、非常に大きな町、4 コス [1 コス ≒ 2 マイル]、1 コス離れて<sup>パゴダ</sup>塔、とても大きい。——4 コス。

3月3日。Bangamoddan 着、5 コス、川沿い、そこで食事。セランポール (Serampore) へ、2 コス、溜池沿い。ここではサトウキビが圧搾される。本日の移動、7 コス。

3月5日には、以下のような日誌をつけた。

フウグリ着、2 $\frac{1}{2}$  コスだが、1 コスを 2 $\frac{1}{4}$  マイルとすると (これはオリッサのコスよりかなり短い)、計 61 $\frac{7}{8}$  英マイルであり、それにオリッサで移動した 112 $\frac{1}{4}$  マイルを合わせると、計 174 マイルとなる。[オリッサの] バラゾール (Ballasore) からフウグリへの全旅程は北東に向かっていると思われる。東に 123 $\frac{2}{10}$  マイル進み、緯度は北に上昇。ともに陸路を移動したのは、ベンガル商館長 Shem Bridges 氏、副商館長 Walter Clavell 氏、Edward Read 氏と同氏夫人、Gabraell Townsend, Wm. Bramston 夫人の Sarah、そして私。

フウグリは非常に大きな町で、多くのポルトガル人が住んでおり、町の大部分はかつてショプトグラム (Satagam) と呼ばれていた。イングランド人とオランダ人はそれぞれ、ガンガーの支流である川沿いに位置する堂々たる商館を有している。

日誌の残りも似たような調子で続き、町の名前、距離、時折そこで見出される商品、各種の雑多な情報を並べている。大きな町ほどやや長い注釈が加えられた。例えば、[ベンガル・ビハール境界の] ラージマハル (Rajmahal) は石造りや草葺の家々のある大きな町として描写され、王侯の宮殿と庭園、そして「イングランド人の家」が同じ長さで記述されている (Marshall 1927: 70-71, 116-117)。

旅行者たちは、特定の町の重要性を繰り返し証言した。マンデルスロ (Johan Mandelslo) は、ベンガルが各地方のうち最も強力であり、ガンガーが流れ込む湾にその名が付いていると記した (Mandelslo 1669)。その主要都市はラージマハル、ダカ、「Philipatan」、[「ショプトグラム (Satigam)」、]である。ベンガルはいくつかのより小さな地方に分かれ、コメ、砂糖、木綿、そして何より全インドで最高の絹が大規模に商われていた。マンデルスロは、そこの住民は異教徒で「粗野」であると記している (Mandelslo 1669: 16, 94-95)。



かの有名な『ムガル帝国誌』の中で、ベルニエ (François Bernier) はベンガルの豊かさについて述べた (Bernier 1916)。ムガル国家の政治的發展について、かれは〔17世紀中頃の<sup>スーバダール</sup>州総督〕スルターン・シュジャー (Sultan Shuja) が在地の<sup>ラージャー</sup>豪族らを「完全に破滅させることで富を蓄積した」からだと記している (Bernier 1916: 26)。スルターンは下ベンガルのポルトガル人から数門の大砲という支援も得た。豊かさは多くのヨーロッパ人を惹きつけ、そしてスルターンの政策は、かれら、とくにポルトガル<sup>ミッシヨナリー</sup>宣教師団の定住を奨励した。宣教師団は、将来的な富と教会の建設という目的をもっていた。なぜなら、近年の研究で明らかにされているように、<sup>(3)</sup>王座を最終的に獲得するには、諸侯との同盟関係やネットワーク形成が何よりも効果的だったからである。ムガル朝がフグリを拠点とするポルトガル人との間に抱えていた従前の問題と、アラカン半島からやってくる海賊についても言及されている。テルシャーによれば、通常はイングランド (あるいはヨーロッパ) と比較するであろうところ、ベルニエは、この広い地域をエジプトと比較し (Teltscher 1995: 14)、多種多様なコメ、穀類、その他の生活必需品、絹、木綿、藍、マンゴーがあまりに豊富であったため、近隣・遠隔両方の諸国家に供給されていたと指摘している。これらの商品は、ガンガーを遡上してパトナーまで、海路ではマシリパトナム、コロマンデル海岸、セイロン、そしてモルディヴ諸島へと運ばれた。砂糖は〔中央インドの〕ゴールコンダや〔南インドの〕カーナティック、アラビア、メソポタミア、そしてペルシアに送られた。ベンガルは砂糖菓子で有名で、とくにポルトガル人居住地域では、かれらが菓子を「作る技術に優れ、かれらによって重要な交易品に成長した」と称された。柑橘類、<sup>アンマロク</sup>油柑、パイナップル、小さな<sup>チユリ-プラム</sup>ミロバランスモモ、ライム、そしてショウガで作った果物の砂糖煮もよく知られていた。少量ながら十分な量が栽培されている小麦は、ヨーロッパ船に供給される航海用堅パンにも用いられた。3種ないし4種の野菜、コメ、そしてバターが人々の基本食品で、きわめて低廉であった。食肉も魚も豊富であった (Bernier 1916: 438)。以下のようにも記されている (Bernier 1916: 202)。

インドには、人口が十分に多く、土地がよく耕されている地域が多々存在する。また、職人は、生来怠惰ではあるが、必要に迫られるか何かして、絨毯、錦織、刺繍品、金銀糸の布、そして各種の絹・綿製品の生産に携わっている。それらは国内で用いられたり、海外に輸出されたりする。

同書では、モルディヴから輸入される<sup>カワリー</sup>貝貨とモンスーンのパターンも議論されている。イエズス会とアウグスティノ会は大きな教会を有し、フグリのキリスト教徒人口は8,000から9,000を数え、その他の地方にも2万5,000人以上のキリスト教徒がいた。木綿と絹の生産量は膨大で、ムガル帝国全土、アジア、そしてヨーロッパにとっての倉庫のようであった。上級や低級、生成りや色

---

(3) 例えば, Faruqui 2012 を参照。

物、あらゆる種類の綿布が大量に生産されたが、オランダ人のみがそれをとくに日本やヨーロッパに輸出した。イングランド人、ポルトガル人、そして現地の商人も、綿布を絹製品とともに手広く扱った。絹は他地域の上級品よりも低廉であった。オランダ人は700ないし800人の人々をカシムバジャル（Kashimbazar）の絹工場で雇用し、イングランド人やその他の商人も同様であった。硝石は、オランダ人とイングランド人によってアジア各地やヨーロッパに送られた。上質のラック染料、アヘン、蠟、麝香、ヒハツ、さまざまな薬種、そしてバターが海路で輸出された。オランダ人とイングランド人の死亡率は、予防措置にもかかわらず当初は高かったが、低下した。水夫たちは酒量や「インド人女性を訪れる」頻度を減らし、「アラックとタバコ」に耽らないよう求められた。河川は商品運搬や飲料水の供給に適しており、河川沿いには、人口稠密な町や村、コメ、砂糖、穀類、野菜、カラシナ、搾油用ゴマ、低木の桑が植えられた畑が並んでいた。川の中に形成された島はとりわけ肥沃で、果樹やパイナップルが植えられ、みずみずしい緑の木立が水路で区切られていた。旅行者の多くは島々に棲むトラの存在も記述し、猛獣によって守られた楽園のイメージが生みだされた。ひとたび猛獣が守る門をくぐれば、人は、細流という銀白色の小川が織り成す青翠の空間に足を踏み入れることになるのである。

パウリー（Thomas Bowrey）は、この地域についての詳細な記録を残した（Bowrey 1993）。パウリーは、ベンガルを多くの素晴らしい航行可能な河川のある「ヒンドウスタン（Hindustan）で最も有力な王国」と描いた。かれは、ガンガーやフググリ川などの名前を挙げ、村々や森、豊富な砂糖・綿花・ラック染料・蜂蜜・蜜蠟・油脂・コメ・<sup>グラム</sup>豆類やその他の価値ある商品を生みだす耕作地、廉価な食料品、貝貨・金属貨幣の使用などに関する簡単な注記を付けている。また、これらの河川が「ヨーロッパ商品を内陸の町や都市に運び、この王国や別の王国で買い付けた商品を運びだすための優れた利便性」を有していることにも言及した。さまざまな荷を積んだイングランド、オランダ、ポルトガルの船がこの王国の港に寄航し、インド各地、バルシア、アラビア、中国、そして南洋（South Seas）との間で交易が栄えた。イングランド人とオランダ人は、少額の元手でそれぞれ商館を有していたが、かれらがそこにいる本当の理由は諸侯と宮廷に近いからであった。〔ムガル帝国第5代皇帝〕シャー・ジャハーンの子の一人スルターン・シュジャーがこの地を治めたが、パウリーがいくらかの詳細を述べるとおり、のちに〔後継者争いに〕敗北した。明らかにヨーロッパ人、とくにイングランド人はこの一連の政治的出来事に苦しんだ。というのも、スルターンは慈悲深く、「イングランド国民の本当の鼻眞」だったからである。

パウリーはこの地方の主要都市目録も作成した。ダカ——大きく、広々としているが湿地の上にある、しかし、近隣の航行可能な良い河川と上質の水が欠陥を補っている。その他の特徴として、大きな建物、人口、常備軍、象が挙げられている。〔オリッサの〕カタック——2番目に良い都市で、非常に立派で美しいが、ダカほど大きくはない。多数の大きな建物、街路、水源、マンゴーその他果物の果樹園があった。カタックの<sup>ナワーブ</sup>太守はここに居住していた。パウリーは、豪商を食物にして

いたと伝えられる太守や〔州総督の〕シャーイスタ・ハーン (Shaista Khan) を批判的に記述している。フググリ——「有名で豪奢」な都市であり、立派な建物、庭園、果樹園、バザール、宿泊所が数多くあり、人口は稠密で、アジア最大のオランダ商館とこの地方におけるイングランドの主商館もある。豪商中の豪商が居住し、ベンガル、オリッサ、そしてパトナー産のありとあらゆる品々は、公設バザールや専門市場で取引された。カシムバジャール——交易や豪商で有名であり、その名自体が主要な市場を意味した。オランダ人とイングランド人が商館を有していたが、後者の方が交易規模および商館員数でまさり、商館も大きかった。デンマーク人と「ベンガル (Bengala)」政府の間の紛争や、バンデル (Bandel) に多く居住するポルトガル人の存在も記されている。人々について、パウリーは、きわめて貧しいものの、その「勤勉さ」は賞賛に値すると述べている。礼拝の習慣は、「不道德」なバラモンが奨励する「とても奇妙な」ものと特徴づけられている。女性についての寸評もいくらかみられる。森では、野獣、トラやクマが跋扈し、ガンガー河口近くでは樵夫や塩職人がしばしば被害にあっていた。それにもかかわらず、概して繁栄しているが、それは「他国で生まれた何千もの人々がベンガル (Bengala) で暮らし、そして老いて人生を終えるからである」としている (Bowrey 1993: 131-220)。

ハミルトン (Alexander Hamilton) も、この地域の町、都市、そして習慣について述べ、目録化した (Hamilton 1995 II: 3-26)。かれによれば、かつては〔オリッサの〕ピプリ (Pipli) がイングランドとオランダの商館が置かれた交易の中心であったが、〔フググリ川河口の〕「Ingellie」や「Kidgerie」のように衰退期に入り、商館はフググリとカルカッタに移動し、商人もいなくなってしまったという。最初の安全な錨地は Rogues という川であることが詳しく述べられ、その後には町のリストがつづいている。「Culculla」(穀類、粗布、バター、そして油脂の市場町)、オランダ拠点のバンクシャル (Bankshall)、ラダノゴル (Radnagar) (綿布、絹スカーフ)、「Bussundri」、「Tresindi」あるいは「Gorgat」、そして砂糖で知られる「Cottrong」、週に一度か隔週に一度穀類市が開催され、大量のコメを移出する「Ponjelly」、「Tanna」城塞、そして「Governapore」。ウィリアム要塞についてある程度の紙幅が使われ、イギリス人居留地の小史が記述されている。それには、知事居館、商館員や書記の宿舎、そしてEICの倉庫についての好意的な所見なども含まれる。あらゆる種類の食料品が安価で豊富なことが、この国をたいへん居心地良くしていたという。ウィリアム要塞には、パトナーからの船団を運ぶことになっている200から300人の兵士がいた。あらゆる宗教が許容されていた。18世紀初めにおいて、その居留地には「製造所」<sup>マニファクトリー</sup>がほとんどなく、進取の気性や勤勉さを育てていなかった。ハミルトンは「有力 (な役人) が後ろ盾となった圧政と非道」の例も挙げている。

つづいて、川沿いの他の主要な町について記述されている。フググリ川の下流4マイルにあるバラノゴル (Baranagar) にはオランダ人の邸宅と庭園があった。そこのデンマーク商館は荒廃していた。〔フランスの〕オステンド会社は、「Bankebankshal」に商館を有していたものの、1723年にそこを離れ、シャンドルナゴル (Chandernagore) に移らざるをえなかった。そこでも商業的には

あまり成功しなかったが、教会に行き、「ミサに参列すること、つまりベンガルにおけるフランス人の主な仕事」はできた。チンスラ (Chinsura) には、大きなオランダ商館と庭付きの多数の良い河上家屋があり、オランダ東インド会社の統治下にあつて、現地の人々やアルメニア人が住んでいた。フグリは交易が盛んな大きな町で、ムガル朝の税関がある交易の中心として記述されている。50～60隻の船が容易に荷積みできた。10月にはパトナーから硝石を供給する船が集まったが、曳航して戻らねばならなかった。アヘン、ヒハツ、ショウガ、タバコ、そして多種の織物が主要な交易品であった。以前はポルトガル支配下にあつたバンデルやイングランドとオランダの商館があるカシムバジャルは、規模が大きく、商人たちが何度も繰り返し訪れ、「多数の価値ある製造所を發展させる」勤勉な人々がいる健康的な場所であった。ムガル朝の造幣局があるムルシダバードは「最大の交易地」だったが、その機能はのちに〔近隣の〕カシムバジャルに移った。マルダ (Malda) は大きく、人口の多い、商人が集まる場所であり、イングランドとオランダの商館があつた。パトナーには外国人商人が訪れ、硝石や生糸、アヘンを買付けけるためのイングランドとオランダの商館があり、王族諸侯の邸宅もあつた。聖なるバナラスには大学と神学校があつた。ハミルトンはこのルートより先〔の北インド〕には取返して進もうとしなかったが、代わりにダカを訪れている。ダカは、ベンガル最大の都市であり、最安値かつ最高品質の木綿と絹を得ることができ、安価で豊富な食料品も手に入り、そして人口が多いと記述されている。チッタゴンと〔メグナ川河口の〕シオンディブ島 (Sandwip) にも言及されている。かれはこの地域を「地上の樂園」と称した。

マークレー (Robert Markley) は、『新・東インド旅行記』を通じて、ハミルトンは現地の文化、歴史、商品や商慣行についての議論を、海、海岸線、浅瀬や港湾についての記述と織り交ぜている」と述べている (Markley 2007)。17世紀までに、オランダ人による海路を含む海図製作では、すでにインドの海岸線が描かれ、港も書き込まれていたが、内陸部は意図的に空白のままであつた (Nanda and Johnson 2015: 110)。したがって、さまざまな方法で記述された文書が、地図には依然として欠けたままの詳細を提供していたようである。

18世紀の半ばから後半までには、あらゆる著述家や旅行者にとって、ベンガルの政治的命運〔ブラッシーの戦い以降の変化〕は白日のもとに晒されていた。このような巨大な変化が生じるとは、早い時期の書き手は想像することすらできなかった。イングランド人による予想外の征服が起き、そしてムガル朝が衰退し、オランダ人やその他のヨーロッパ人商人も後退したのである。こうした偶然と予期せぬ結果は、他地域でも同様にみられるように、ベンガル内部の發展にも多大な影響を与えた。とはいえ、大半の旅行者は、町々のほか、この国の各地について、そして世界中からやってくる商人の存在について書きつづけることになる。

グロース (John Henry Grose) は、ムガル帝国は「ヒンドウスタン (Indostan)、デカン (the Deckan)、そしてベンガル」という三つの地域から成り、最初の地域は皇帝の直轄だが、残りは副王たちが統治し、かれらは事実上独立していると述べている (Grose 1772: 233)。ベンガル・ビハール・オリッサ

スーバダール  
の州総督はあらゆる意味で「絶対君主」であった。ベンガルの域内および域外交易はきわめて重要であった。アジア各地からベンガルを頻繁に訪れる、ペルシア人、アビシニア人、アラブ人、中国人、グジャラート人、マラバル人、トルコ人、「ムーア人」、ユダヤ人、ジョージア人、アルメニア人といった大勢の商人たちの存在が、それを証明している。「東インドに拠点をもつ〔あらゆる〕キリスト教諸国の民」が船を送り、これら各地の商品を「自身のインド交易のための輸出品にするほか、一部はヨーロッパへの帰り荷とした」。かれは、絹、綿布、コショウ、コメ、硝石、木材、「terra-merka〔雲母の一種と思われる〕」、ラック染料、黄色および白色の蜜、藍、樟腦、アロエ、「ガルシニア (gum gutta)」などの主要品目も挙げている (Grose 1772: 234-35)。毎年 56 隻の船が荷を積んで世界各地へ向かった。

いくつかの点で、グロースの記述はハミルトンと似通っているのも、先人の記述から引用したのかもしれない。フグリ川沿いの町が、ここで見出される主な商品とともに記されている。例えば、「Culculla」にはおそらく粗布や穀類、油脂のよい市場があり、ラダノゴルは木綿、織物、そして絹ハンカチの製造で有名、「Ponjelly」は小さな穀類の市場町で、大量のコメを移出している。カルカタは大きく、居心地よく、人口稠密で、多くのイングランド人民間商人や多数の富裕なインド人商人が EIC に地域の商品を供給していた。城塞、商館員居住区、EIC の商品倉庫や軍需品の貯蔵庫のほか、美しい庭園、養魚池、病院、船の修理と船底清掃のための造船所、そしてアルメニア人庭園にも言及されている。特筆すべきは、さまざまな宗教が共存していたことである。「偶像崇拜者 (Pagans) は隊列を組んで偶像を運んだ。ムスリム (Mahommedans) は拒絶されなかった。そしてローマ・カトリック信徒は教会を有していた」。イングランド商人と水夫も教会の建設に寄付していた。ヒンドゥー教徒はガンガーを崇拜していた。フグリについて、グロースはきわめて肯定的な見解を示し、町の規模が大きく、多くのインド人とポルトガル人が暮らし、それだけではなくベンガルと商業上の関係をもつあらゆる国にとって出会いの場でもあると述べている。その倉庫と商店は、国中で最も高価な商品で溢れていた (Grose 1772: 254)。

グロースは、民族的な自尊心が欠落していたわけではないが、EIC の体制内部の腐敗を看過することはできなかったようである。例えば、EIC は 1750 年にパトナーから商館を引き揚げたが、業務上横領、捏造された会計項目、また「不品行」のため、10 万ポンド以上の損失を出したことに言及している。また、かれはイングランド人が太守や他のヨーロッパ人の商売敵を打ち負かすことで、ベンガルの主要な交易拠点を掌握した方法を詳述している (Grose 1772: 287-325 も参照)。かれが大喜びしながら書き留めているように、短期間のうちにフランス人は完全にベンガルやその属領のすべてから追いだされた。そして、EIC はより確固たる利益を手に入れた。それは、

ごく少数の兵士と短期の軍事行動によってである。それは、国王や強力な軍隊が、相手が決定的に衰亡するまでヨーロッパ中の血管という血管から血が流れ得るほどの血塗られた戦争で勝ちとつ

た以上のものである。驚くべきことに、ヨーロッパの大半の国と同じくらい広く、土壌の肥沃さにおいてはそのどことも等しく、商業の豊かさにおいてはその多くをしのぎ、そして人口においてはそのほとんどを下回らない広大な王国の政府が、ヨーロッパでは軍隊の名に値しないかくもわずかな兵士によって、まったく突然に権力の座を明け渡すことになったのである。勝者はイングランド人で、その指導者はクライヴであった。かれは生まれながらの将軍だったようだ！ ユスティヌスやクルティウスやらが今の世に生きていたなら、アレクサンドロス大王の栄光に一人のイギリス臣民が肩を並べていることを知って何と言うだろうか？ アレクサンドロスは12万の騎兵と歩兵からなる軍でインドを侵略したが、かれは大きな困難もなく征服できた。ポロス王はかれの手に落ち、かれは王を復位させたのである。グレートブリテンの一民間人が、勇敢かつ偉大な偉業を達成したのだ。アレクサンドロスのわずかな手勢は地球の最果てまでかれについていったであろうが、かれは自らの大軍勢にガンガーを渡って〔ベンガルにあった古代ゴンガリディ国の〕アガメネス王（Aggamenes）を攻撃するよう説得できなかつた（Grose 1772: 263）。

グロースは他のヨーロッパ人について「愚鈍で、無分別で、血に飢えた頑固者のポルトガル人……非社交的な冷淡さ、傲慢な態度や儲けに対する執心をもつオランダ人、過度に洗練された陰険な慇懃さを備えたフランス人」などと、侮蔑的な記述を残している。

グロースは、同時代のイングランドでは、インド亜大陸では基本的に奢侈品が大規模に取りされ、それらが低価格のためにイングランドの手工業品が不利な立場におかれているという誤った見方がされていると指摘している。かれはまた、金銀地金がインド製品の代価として流出しているという主な〔インド製品輸入〕反対論も取りあげている（Grose 1772: 252-58）。そして、これが間違った印象であると明確に主張している。一方で、インド人の織工などについて、「休むことのない工夫に富んだ勤勉さ」をもってしても自らを貧困から救うことは到底できないが、他のいかなる仕事にも向いていないと指摘している。それゆえに、利益は、ブローカー、<sup>バニーヤン</sup>大商人、そして「高利の前貸しに投資する以外に利用されない現金を金庫に溜めこんだ女々しい男たち」のもとに向かってしまうのだという。かれは、東インド諸国およびインドで商取引をおこなうためには、イングランド人が武力を用いることも止むを得ずという武力擁護論を唱えた。なぜなら、〔インドの〕商人が、自らが住む国家から受ける抑圧から守ってくれる強力な国に愛着を示すからであり、イングランド人がインド亜大陸に足場を築くことができたのは、陸と海の両方で武力を行使できたからである。

スタヴォリヌス（J. S. Stavorinus）は次のように観察している。さまざまな「<sup>ネイション</sup>民族」がベンガルに住んでいるが、この「アジアの最も実り多い地域」において、「ムガル人」が最多数であり（Stavorinus 1798: 406）、現地住民である「ジェントウー（Gentoos）」は「ムーア人」の何倍もいる。かれは、シャンドルナゴル、チンスラ、フルタ（Fultah）、ギリハティ（Giretti）およびカルカッタについて発見したことを記述した。先人たちと同じように、この地域の肥沃さが、驚くほど大量の絹、木綿、硝

石、アヘン、小麦といった多様な主要交易品を生みだしていることに触れている。先人たちと異なるのは、かれがカシムバジャル近郊からの絹が集まる様子について詳細に記述し (Stavorinus 1798: 472)、綿花について、域内で大規模に栽培されているものの、綿織物生産の需要には到底追いつかないためスーラトから大規模に移入されていると述べていることである (Stavorinus 1798: 473)。これらの産地 (*arangs*) はあちこちに点在した。ビハール・アヘンも東アジア各地に輸出された。あらゆる種類の香辛料、コショウ、日本銅、白檀、スオウ、錫、鉛、<sup>ビュウター</sup>シロメ、ヨーロッパ産品などのありとあらゆる品がベンガルでも売られていた (Stavorinus 1798: 480)。貨幣制度についてもいくらかの紙幅を割いて論じられている。

不作になることはめったになかった。オランダとは異なり、ここには、森や林、木々に満ち、いくつかの城塞があった (Stavorinus 1798: 391-92)。種々の果物や、大量の雨水で満たされる溜池の存在にも言及されている。河川や細い支流が全域を覆い、「これらが活用され、あらゆる商品がある場所から別の場所へと容易に運搬されているのだ」 (Stavorinus 1798: 399)。川は町、村、田園に縁取られ、田園風景を美しく際立たせていた。いくつかの水路は大型船も十分に航行可能であった。かれは、オリッサのジャガンナート寺院の莫大な富についても記述している (Stavorinus 1798: 100)。大勢の巡礼者が寺院に莫大な寄進をするからである。巡礼者——例えば、フググリ川と〔その少し北の〕トリヴェーニー川に沐浴し、ガンガーの水を持ち帰る者たち——による交易も大規模なものであった。そして、価格は、それが最終的に売却される場所までの移動距離で決まった (Stavorinus 1798: 405)。スタヴォリヌスは、飢饉への言及も忘れなかった。かれによれば、それはコメの不作に起因することもあったが、主として前季のコメをEICが独占したのが原因であったという。貧農にとってコメを買うことは、かれらの資力をはるかに超えていた (Stavorinus 1798: 153)。それとは別に、天然痘の流行も同様の荒廃をもたらした。多くの人々はとても貧しいが、周旋人や商人はきわめて裕福で、後者は抜け目がなく商売をおこなっていたという (Stavorinus 1798: 408)。かれの見解では、明らかに、経済発展は、すべての人に平等に益したのではなく、その果実は非対称的な社会構造に従って分配され、しかも、それはその非対称性をより深めていたのだった。

「職人」は、ごくわずかな道具しかもたないが、かれらの巧みな熟練の技は格別の賞賛に値し、精密さと創意工夫で見本品を模倣することができた。スタヴォリヌスは、この地域の歴史も熟知していたようである。歴代太守、<sup>ナワブ</sup>かれらとムガル中央政府との関係 (Stavorinus 1798: 459)、ひとたびイギリス人が徴税権を手に入れた後の太守の命運、EICが二流の商業勢力からベンガルにおける政治権力を確立するにいたる過程、カルカッタの成長などである (Stavorinus 1798: 481-534)。オランダ人の存在はチンストラとボラノゴルに押しこめられた。チンストラには、食料品を中心とした多種の商品の市場があった。ヨーロッパ人は明らかに、数多くの給仕人を雇い、莫大な費用を必要とする安楽な生活を送っていたが (Stavorinus 1798: 521-24)、それはベンガル社会における新たな支出部門でもあった。スタヴォリヌスは、これまでの記述と同じく、だれもが従事しうる「利点の多

い交易」——そこは大規模商業にとりわけ有利な土地であり、どこよりも肥沃で、必要な商品を何でも生みだす——がある一方 (Stavorinus 1798: 532-33)、それが、今や EIC の抑圧に苦しみ、同社の利益にまで影響していることを観察している。

ホッジズ (William Hodges) は、見聞し、絵を描き、療養することを目的に 1781 年にベンガルにやってきた (Hodges 1794)。かれが観察した通り、カルカッタでは、ヨーロッパ人は「大都市のど真ん中で、城塞の外側の跳ね橋を通らずに」上陸した。「ここには鋭い疑いの目を向ける番兵はおらず、手荷物を止められることもない」のであった。かれらはその都市にきわめて好ましい印象——広い街路、荘厳な建物、広々として余裕がある街——を抱いて去った。ホッジズは、カルカッタにヨーロッパとアジアの「様式」の混合によるコスモポリタンな性質を見出している。そこには、多様な種類の交通手段 (四頭立て馬車から牛車まで)、ヒンドゥー教の儀式、ファキール [ムスリムの行者] がみられ、「世界のどの都市が異邦人にみせるよりも、おそらくもっと新奇で並外れた光景」を創りだしていた。地域全体について、かれは、豊富な作物、(「耕作地でよく育った」) ウシ、人々と繁茂する緑に満ちた小奇麗な村々を記録した。ムルシダバードのカトラ [城塞とそれに付属する大市場] には朽ちる兆候があったが、かれは創建者に惜しめない賞賛を送っている。ラージマハル遺跡もかれの注意を引き、とくに Kaliganj 付近の滝や木立はイングランドの公園を思い出させるものであったとする。[ビハール東部の] バーガルプル (Bhagalpur) からモンギール (Monghir) への道中では、整備された街道、耕作地の数々、小綺麗な村々、街道側の墓地などが記されている。かれはカルカッタとモンギールの間のさまざまな風景についても書いた。それは、豊かな土壌の平原にはじまり、ラージマハル辺りから木々に覆われた山がちな地形に変わり、土地と空気はだんだん乾いていった。

往路は街道を<sup>バランキン</sup>興に乗って旅し、道中たくさんの小さな休憩所、篤志家の寄付や公的支出によって建設された<sup>サライ</sup>宿駅、木々や井戸、旅の一行 (「道中で出会うことが想定されていた旅人たち」)、商人、兵士、ファキールなどに出会った (Hodges 1794: 13-32)。一方、帰りは河川路で戻り、種々の小舟、ガンガーの岸辺、川沿いの<sup>ガト</sup>埠頭、小寺院、<sup>ガンジ</sup>市場、土手で沐浴・礼拝する人々や、ライン川でさえ一本の小川にしてしまうほどなみなみとした水量に目を向けた。清潔さについての意識や、人々のもてなしの心も書き留められている。他の記述と同様に、町々の概要も示されている。[フグリ川沿いの] シャンデルナゴル、チンスラ、フグリ、(当時までに以前の輝きの多くを失っていたが) カルナ、ノディヤ、カトヤについて、近年の歴史的重要性に関する確かな情報に基づく所見が示された。また、著名な考古学遺跡であるボホロンプル、カシムバジャル、ムルシダバード、Sooty、モンギール、[東西に] 細長く人口が多いパトナー (そこには高い建物と狭くて不潔な街路がある)、Bankepour、ディナープル (Dinapore)、バクサル (Buxar)、チュナール (Chunar)、バーガルプル、デーオガル (Deoghar) [などのベンガル、ビハールの都市] に言及されている。そのうちのいくつかには EIC 軍駐屯地もあった。ホッジズと以前の旅行者たちの旅を比べると、EIC の政治的・軍事的な存在感が



相当に増大していたことが分かる。したがって、新たに重要性を増した拠点や、ベンガルから内陸に入りこんだ北インドに記録がおよんだのである。例えば、モンギールのモスクの丸屋根など、建築様式が賞賛されている建物もあり、ヨーロッパの丸屋根よりも素晴らしいとされた。そのエントランスは、ゴシック様式の大聖堂の扉と比較されている。かれはまた、ギリシア風建築を独創性なくやみくもに模倣することに反対し、その土地の気候と使用される材料、住民の習慣や求めるものが、理想的に建築に影響を与えるはずだと述べている。とはいえ、これが繁栄している EIC 支配下の地域を描いているということを、読者は忘れてはならないだろう。とりわけ、[バナーラス<sup>ラージ</sup>王] チェット・シン (Chait Singh) の反乱についての記述では、EIC 政府と総督がきわめて肯定的に捉えられているのである。征服地についての簡単な言及もあった。巡礼が交易をとまなうという記述もあった。というのも、かれはデーオガルで多くの巡礼者がガンガーの水を運び、その水の価格が川から運ばれる場所までの距離に比例していると書き留めている (Hodges 1794: 94)。[ビハールの東半分を占める] "ジャングル"・テライ (Jangal tarai) 地域では、1770 年の大飢饉の影響がなおも尾を引き、死亡と移民の両方によって人口が減少していた。ここでもかれは、当初は訝しんでいたにもかかわらず、EIC 官吏が苦難を解決するために全力を尽くしたことを文書によって確信したと述べている。

グランプレ (L. De Grandpre) は、インドにおけるフランス人の勢力が衰退しつつある時期に旅行し、記録を残した (Grandpre 1995)。そして、イングランド人の引き立て役に甘んじるというフランスの政策を酷評した。かれは、シャンドルナゴルやベンガルの他の拠点、バラゾール、パトナー、ダカ、シヨプトグラム (Chatigam) が、[南インドのフランス領] ポンディシェリに依存していると述べた。ポンディシェリの政府は、カラikal (Karikal) からベンガルの EIC に塩を供給する許可を出しており、その価格と量は予め固定されていた。それは、フランス東インド会社の主な収入源であった。かれは、数節を使ってインド亜大陸の手工業製品について長々と記述し、フウグリ川を遡る航行についても道中のさまざまな町々の詳細とともに描写した。クルピ (Kulpi) / ポート・ダイヤモンドには郵便局、「製パン所」、海軍病院、「屠畜場」、そして市場がある。フルタはオランダ人の所領である。チンスラはかつての絶頂期から転落し、今では商品を集荷するために毎年送られるギャリオット船 1 隻しか来ないが、宿屋と司令官の居館がある。だが、チンスラのインド人地区は広大で、品揃えが充実したバザール、「自由な遊興」の場がある。[ベンガル中部の聖地] マヤプル (Mayapur) は、かつてフランス船が立ち寄り「量的にも質的にも大規模な施しを行う」場所であったが、フランス人の運命の衰えとともに衰退していた。かれは、そこから数リーグ [1 リーク ≒ 3 マイル] 離れたところに庭園と豪華な宮殿があると記している。それは、そこを訪れる者を「東方の首都、アジアにおけるイングランド帝国の中心都市、そして世界で最良の植民地。その建物の荘厳さ、川辺を魅力的な庭園に様変わりさせるといふ贅沢さ、そして、それらの装飾の高価さと優雅さ、これらすべてがインドの征服者とガンガーの支配者の富と権力を示している」と言わしめるような

場所であった。

グランプレは、<sup>カリリカム</sup>要塞についてより雄弁に語っている。「ヨーロッパの外に存在する最も素晴らしい要塞……建造物群の雄大さと壮麗さによって驚かされる」と。そして、カルカッタ自体は高貴で威厳のある都市だが、立地そのものはふさわしくないと述べた。かれは、広大な広場と大きな建物、教会、シナゴーク、モスク、寺院、記念碑、60万の人口を抱える巨大な「<sup>インド</sup>居住地区」を詳しく記述している。市中は清潔ではないとし、さまざまな問題についての所見が解決法とともに書き留められている。社会生活にも記述がおよび、食後の水タバコが習慣であり、女性も同様であったとする。タバコには別のものも添加されていた。新世界で栽培されたタバコは、遅くとも18世紀までには、インドで日常生活の欠かせない一部となっていたのである。カルカッタには幅広い輸送手段があったが、ベンガルの他の地域では輿が使われ、舟運が一般的であった。かれはまた、市内の造船産業にも注目している。EICはイングランドとの貿易独占を享受したが、インド域内の交易は「自由」であり、中国を含む他地域との間にかんがりの商業上の関係が構築されていた。ヨーロッパで見かける硝石やモスリンはこの地域から供給され、対価として、スペイン硬貨、金糸、銅、鉛、鉄塊、錬鉄、ヨーロッパ人向けイングランド製品、ワイン、ブランデー、海塩、そして海事用品が輸入された。コショウとアラックはマラバル海岸から輸入された。生糸、南京木綿、陶器および茶は中国から、そしてそこにはマラバル綿花が送られた。ベンガル産の穀物はインド亜大陸のあらゆる他地域に送られ、絹はスーラトから輸入され、モスリンとヨーロッパ商品はマカオとフィリピン諸島に送られた。そして、これらすべての商品がアジア全域に送られた。「かくもさまざまな分野に拡大した商業は、それに関わる者たちを豊かにしないはずはなく、したがって、カルカッタはインドにおける最も富裕な町である」とかれは指摘する。民間商人はとくに富裕なわけではなく、富裕なEIC社員とは区別される。EIC社員は自ら急速に豊かになっただけでなく、現地の「<sup>サールカール</sup>代理人」をも豊かにした。貨幣制度についても記述されている。かれは、イングランド人がいかなる反対もなく国全体に君臨したと述べる。ヒンドゥー教徒とムスリムは不和によって分裂しており、イングランド人はそれを統治に利用し、どちらか片方を抑えるために巧みに操った。

他の旅行者たちと同様に、グランプレもコメ、硝石、野菜、そして藍など作物の豊富さについて書いている。1794年に、イングランド人によるサトウキビの新たな栽培法が実験的に開始され、幸先は良いようで、かれは、ランバート・ロス商会 (Messrs. Lambert and Ross) のプランテーションを訪問している。労働者は中国から連れてこられた。手工業製品はさまざまな種類のモスリンからなった。イングランド人はカルカッタ近郊に捺染リネン製造所を設立していた。これについて、グランプレは、品質で劣り、アクセスが困難なパトナーのリネン製造業を破滅させると予測している。航行可能なガンガーは交易にとって大きな強みだった。[秋に行われる] <sup>ドゥルガ</sup>女神祭祀 (かれは「マダム・ドゥルガ」と表現している) にも言及されているが、それを金持ちが自身の邸宅で祝い、「贅のかぎりを表現しようとして、最も豪華なやり方で部屋を照らした」ものだったとい

う。自分ではこれらを賄えない者たちは隣人を訪れた。「少なくとも町の地区ごとに祭祀がおこなわれ、ゆえにすべての住民たちに祈りを捧げる機会」があった (Grandpre 1995: 62-66)。かれはムスリムが祝う「Jamsey」についても言及している。

カルカッタより先にある町々として、以下が列挙されている。1790 年以降イングランド人 (それ以前はオランダ人) の所領であったボラノゴル。トランキバール参事会のもとにあるデンマーク領セランポールは、交易はわずかで、対岸にはイングランド人が 1 万人規模の兵営を有している。フランス知事の所在地であるギリハティ (Girati)、衰退が顕著なシャンデルナゴル、オランダ人の町チンスラヤ、チーズでのみ知られているバンデルという小さなポルトガル人の町も衰退の危機に瀕している (Grandpe 1995 I: 38, 84, 236-73; II: 1-106)。

これらの後期の記述には、問題、困難、かれらが奇妙な習慣と考えたもの、そして死にまつわる不可解な儀礼なども散見される。それらには、蚊、蠅、トラの脅威、航行が困難な河川路の存在、嵐、1770 年の大飢饉、寡婦殉死、バラモンとそのわけの分からない哲学が含まれるが、いずれにせよ、それらはこの地域に関する記述のごく一部にすぎなかった。

18 世紀までに、旅行記は確実に記述が増え、格段に詳しくなった。政治的出来事、ヨーロッパ各国東インド会社間の競争、そしてまた、もし著者がイングランド人であれば、EIC が覇権を確立するために直面しなければならなかった問題について記述されている。カルカッタは旅行者にとって必須の滞在地となったようである。なぜなら、カルカッタは、近世の相互に接続された商業世界において、影響力と富を増大させていたからである。間接的には、それは同市への莫大な投資や、大規模な労働力の移動をも示している。この時期までには、こうした記述の中で、カルカッタが脚光を浴びるようになると、まるでこの地域もようやく成熟したかのように描かれた。カルカッタは 1690 年に、EIC と EIC に輸出品を供給する者が交渉を行う拠点として建設され、アジアの主たる商業的ハブに成長した。ラージ (Kapil Raj) が示すように、この段階において、カルカッタは「ほんの数例を挙げるだけでも、植物学、地質学、測地学、地図作成術、地理学、歴史学、言語学、そして民族学において科学的知識を生み出す場として名を轟かせ、近代公教育の世界的先駆」としても知られるようになった (Raj 2011: 55-82)。ラージは、カルカッタがコンタクト・ゾーンから、多様なネットワークの連結点としてのコンタクト・ゾーンに、すなわち、文化が遭遇し何かを生み出す結節点へと変化したと指摘する (Raj 2011: 78)。

〔オランダ人の〕スタヴォリヌスなどが記録してきた内容は、皮肉なことに、すでにベンガルにおいて力尽きていたオランダ人にとっては何の役にも立たなかった。実に逆説的であることに、ベンガルについて深く洞察されたものには、ヨーロッパ諸言語、とくにオランダ語とフランス語で書かれたものが含まれるのだ。EIC がインド亜大陸東部においてすでに政治的支配力を確立し、その国が、少なくともいくつかの町や地方のどこかしらを「知り」、記録する機会が増していた頃から、より詳細な記述がみられるようになった。さまざまな官吏や EIC 社員が、詳細な観察記録を通信文、

EIC統治機関の会議録、報告書などに残した。もし情報を必要とする者があれば、当時の旅行記よりもむしろこれらの方を利用しただろう。したがって、多くの研究者が旅行記を植民地化や帝国建設と結びつけてきたが、近世ベンガルの事例においては、それは言いすぎというものである。

それでは、一体旅行記は何のために書かれたのだろうか。故郷の紙上旅行者に遠くの異世界を瞥見する機会を与えるためだったかもしれない。しかし、著者たちが示したのは、紙上旅行者が訪れえないほど異質な世界ではなく、かれらと何らかの長期的な交流を期待して見せるような世界であった。したがって、知識の蓄積のためだったといえるかもしれない。支配階層や高級軍人などを除けば、個人が、場所や風景についての記述を見せることはあっても自分が書いたものを世に出すことは稀であった。集団には言及されるが、個人について書かれることはめったにない。18世紀までに、内陸部についての地図もより詳細に表現されるようになっていた。18世紀初めのオステンド会社の地図には、フググリ川が示され、Bankibazar（同社の商業拠点）、Hydisiapore、シャンデルナゴル、チンスラ、Danemarnagore、カルカッタ、フググリ、およびその他の町々が記されていた（Nanda and Johnson 2015: 123–24）。〔1776年に〕レンネル（James Rennell）が作成したベンガル・ピハールの地図は、正確な調査に基づいた最古の全体図であり、県、村、街道、川、湿地、丘陵が詳しく描かれていた。

旅行記は人気のあるジャンルであったようだが、読者の規模は確定しがたい。18世紀末葉のベンガルで競売にかけられた本の山<sup>ロット</sup>が示すように、インドにやってくるヨーロッパ人の本の好みはさまざまであった。そこにはこれまで紹介したような旅行記のうち2、3のものだけが含まれていたようである。1800年以前に、各種の主題で書かれ、カルカッタで出版された368冊のうち、旅行記は10冊にすぎず、そのうち1冊はビルマに関するものであった（Shaw 1981: 41）。他方、18世紀ヨーロッパでは、旅行記の出版が著しく増加していたのである（Keighren, Withers, Bell 2015: 4）。ベンガルの人々がこれらの旅行記を読んだかどうかは分からない。死亡したEIC社員や民間商人の所持品が売却されたので、本を含むさまざまなものが、都市の富裕層や地方の富裕な土地所有者のもとに渡った（Mukherjee 2013: 79）。フィン（Margot Finn）がこうした遺産目録について、かれらの所持品はまさに「アングロ・インディアンのハイブリッド文化が生みだした消費者選好」を映しだしていると指摘している（Finn 2006: 209）。

唯一ベンガル語で書かれた旅行記は18世紀のものである。それには、古い時期の物語詩や『神々賛美の詩（*Mangalkavya*）』の中にみられる旅に関する記述が含まれている——いくぶんかは架空だが、ときおり実在の場所が言及される——。旅行記は、ヨーロッパ人の専売特許ではなく、韻文で書かれたベンガル語バージョンも存在したのである。その旅行記とは、ベンガル暦1177年（1770年）に書かれた『聖なる祝福（*Tirtha Mangala*）』（Sen 1915–16）である。いくつかの点で、それは、当時の総督の随行団の一員として船出したホッジズの旅行記と類似している。それには、聖者クリシュノチョンドロ・ゴーシャル（Krishnachandra Ghoshal）がかれの信奉者らとともに、〔北インド

の] バナーラス、ガヤー、カーシー、そしてプラヤーグといった聖地へと向かった旅について詳しく記述されている。その途上の滞在地で、かれは、Raja Nabakrishnaをはじめとする高貴な人物と面会している。エリート層には、宗教的行動、儀式、寺院の建設と維持などに対する庇護という強い責任感があった (Sen 1915-16: 152)。一行は、さまざまな礼拝をおこなうほか、観光のために岸に上がった。フッグリには定期市や常設市が数多くあり、Golihat には通りという通りに穀物商と商店があり、そこかしこに定期市が立ち、数多くの倉を見かけた。ラージマハルの高い建物、家屋、定期市にかれらは感銘を受けた。かれらは地域の歴史をよく知っていたようで、モンギール (Munger) 要塞などの遺跡も訪れた。ミルザープルのような都市は豊富な品揃えが賛美されている。絨毯と敷布も購入した。この一行は地元の名物料理も楽しんでた。一世紀の間に、巡礼という概念は大きく変化したようである。かれらは主要な聖地ではない場所にも精通していた。強力な地域アイデンティティがすでに形成されていたといえよう。

ベンガルに関するさまざまな記述には、いくつかの共通点がある。大半は、自然の恵み、各種の穀物、主な商品に言及し、後期になると、ほとんどのものに、主要な町、とくにカルカッタと、EIC の権力掌握についての記述が入ってくる。しかし、こうした情報は、将来的な事業展開に必要とされるような、詳細でよく練られたものではない。それらは変化を記録し、すでに起きた変容を忠実に書きとめるだけで、未来がもたらすものを予期するものではない。どちらかといえば、文字で書かれた地理的素描の形式をとった文字化された地図のようなものであり、道すがら見るかもしれない目立つ事物について詳細を添えているにすぎない。それらはレンネルのような地図製作者にとって価値ある情報源となっただろう。もっともかれは [EIC による] ベンガル征服後に地図製作事業に着手したので (Raj 2010: 68; 2000: 129)、より正確に短期で仕上げることができたのだが。

### 3 巡礼としての旅

異なる種類の書物がどのようにこの地域を描写しているか検討してみると、旅がこの地域の社会の本質的な部分を構成していることに気がつく。18 世紀のベンガルの人々は、仕事を次々こなしながら、遠くへ、そしてさまざまな場所へと旅をした。かれらは、経済的あるいは宗教的理由によって、または個人的な問題や自然災害によって旅に出たのであろう。旅は、人々の地理学的な意識と社会的交流の機会を育み、それによって「知識と経験を共有する一団」を生み出した<sup>(4)</sup>。当然のように大勢の放浪者が存在する社会であるので、現実のものであれ想像上のものであれ、移動こそが文化的象徴と考えられるかもしれない。旅に対するイメージは、中世のベンガル語文学、民話、バラッド、そしてミニアチュール絵画や、あとで検討するように、18 世紀の EIC 文書の中に表現されている。

---

(4) 日本との類似について Vaporis 1994: 219 を参照。

人々は、もっぱら宗教的な祝福を求めて旅に出た。そのような神聖な動機の旅でさえ、世俗的で経済的な要素を多分に含んでいた。もし物質的な側面が精神的な側面から完全に切り離せないとしたら、同様に、当時の文化や社会を財政・金融諸制度から分離して理解しえないであろう。人気の巡礼地の組織、宗教的諸制度、そして<sup>3.7</sup>大市もまた、当時の他の商業的な事業と同様に、企業のような形をとり、利潤追求という側面を有していたのである。巡礼のための旅でさえ、エリートばかりが夢中になるものではなかった (Prior 1990)。あらゆる階層の人々が巡礼の旅に出た。巡礼者は、霊的悟りの境地を探索する孤高の者から、集団巡礼 (冒険) への参加者までさまざまであった。タヴェルニエ (Jean-Baptiste Tavernier) の観察によれば、巡礼は、ヨーロッパでみられるような一人か二人ではなく、町全体やいくつかの村の人々が連れ立って集団でおこなわれた (Tavernier 2007, II: 190)。

もちろん巡礼の旅にとって宗教が最も重要ではあったが、巡礼は単なる敬虔な行為ではなかった。敬虔さと好奇心——新しい場所、新しい風景を知ることと、見ることへの渴望——が結びついていた (Vaporis 1994; Zacher 1976)。おそらく 18 世紀には巡礼の「世俗化」——他の動機が目立つようになったという意味で——が進展した (Zacher 1976: 21, 23)。聖地ではなく、大きな市場町、地元有力者の邸宅、有名な戦場などの歴史的遺跡も見聞の対象であった。新たな場所を見ることに對する旅人の興奮が感じられる。こうした見聞の旅は、欲求を満たし、日々の単調な暮らしに潤いを与え、『聖なる祝福』などの書物に明示されているような、お決まりのコースを定めていった (Sen 1915-16)。加えて、「巡礼と商売の旅が一緒に (おこなわれた)」 (Trevelyan 1976: 160-61) と観察されているように、旅には経済的利潤という動機もあった。さまざまな種類の定期市が毎日あるいは週に 2, 3 回開かれる一方で、巡礼のサイクルに呼応するように大市が長期的なサイクルで開催された。そこに、社会の多様な階層が惹きつけられた。

巡礼者は、数多くの寺院があるゴンガシャガル (Gangasagar)<sup>(5)</sup>, Tarapur, Vakresvara<sup>(6)</sup>, 「Burrampooter」<sup>(7)</sup>, 「Byjinant」<sup>(8)</sup>, ノディヤ地方, ビルブム地方などのベンガル域内の聖地を訪れるだけではなく、オリッサのプリーヤ, [北インドの] マトゥラー, プリンダーバン, アラーハーバード, ガヤー, パナーラス<sup>(9)</sup>, ハリドワール<sup>(10)</sup> へも向かった。当時のさまざまな旅行者や EIC の官吏が、大勢の巡礼者の存在を書き記している。巡礼者たちは、[アラカン半島に近い] 「マスカル (Mascally)」 島を見下ろす丘の上の小さな寺院へ押し寄せた (Schendel 1992: 46)。「トゥルジャープル (Tooljapore)」 とい

(5) NAI, Home Public, Vol. 28, 14 Oct. 1765, pp. 227-29.

(6) Raja Prithvichandra 1971, VII: ch. 239.

(7) Anil Chandra Das Gupta 1959: 99.

(8) NAI, Foreign Political (Henceforth For. Pol.) - Secret, 21 Jan. 1773, p. 11.

(9) NAI, Provincial Council of Revenue Dinajpur (Henceforth PCR D) (microfilm), 1 Aug. 1775, p. 276. *Sketches of India* 1816: 26-28, 28 fn. も参照。

(10) Raja Prithvichandra 1971: ch. 234-37, 247; Hardwicke 1801, 6: 310-12.

う町はパワーニー女神を祀る数多くの寺院で有名であった。<sup>(11)</sup>〔ビハールの〕バラディー (Baradi) には、シヴァラートリ祭を祝うため約 5,000 人の信者が毎年集まった。「Jagonnathpur」には 2,000 人が集まり、バイサーク月 (3~4 月) 1 日には、何百人もの人々が Ichchamati 川で沐浴した。これらの場所は、すべて〔ビハール東部の〕プルニヤー地方の「Sayfgung」県内にあった (Buchanan 1986: 63)。同じくプルニヤー地方 Gondwara では、プース月 (11~12 月) の満月の間、信者たち (5,000 人~1 万人) がコーシー川に浸かった。人々は概して、「最も簡便に食糧の供給を受けることができ、かつ水が土手に向かって流れる場所に」集まった (Buchanan 1986: 66, 68)。〔パトナー近郊の〕フルワーリー (Phulwari) 近辺には、<sup>(12)</sup>ダシャーラー祭の間に多くの人々が惹きつけられた。〔その近くの〕チャンディープル (Chandipur) にはバイサーク月には火曜と土曜ごとに 1,000 人以上の巡礼者が集った。そこには神像や寺院はなく、群衆が集ったのはインドボダイジュの大木の下であった (Buchanan 1986: 108)。何十万もの人々が同じように〔パトナー近くの〕ハージープル (Hajipur) にも集まった。<sup>(13)</sup>1758 年に、ムスタファ (Mustepha) は旅行記に次のように書き留めている。

5,000 人ものサンニャーシー〔遊行僧〕の一群が、ガンガーへの巡礼に出る。かれらは主としてデリーと、<sup>(14)</sup>ペルシアとタタールに接するインドの諸地方からやってきた……。

海に近い〔フッグリ川河口の〕<sup>(15)</sup>シャゴル島の寺院への巡礼は数の上ではもっと多く、2 万人におよぶ敬虔な者たちが旅行者に目撃されている。

かれらは大地を食い荒らし、イナゴの群れにも劣らず破壊的である。しかし、認めねばならないのは、かれらが村々の外でめったに混乱を起こさず、また、その村々においてでさえ、ありきたりの物とジェントウー食〔いわゆるヒンドウー教徒の一般的な簡素な食事〕の材料以外に手を出すこともほとんどない……<sup>(16)</sup>とはいえ、突然遭遇してしまったときの (最善の) 対処法は、かれらの中の長を見つけ、まっすぐその人物のもとに行き、かれの旅と巡礼の成功を祈願することである。ただし、その間ずっと出会う人皆に対して、右に左にお辞儀をしまわること……

---

(11) 'Mustepha's Journey', in Dalrymple 1808, II: 232. 現在のマハーラーシュトラ州にある聖地を指すと思われる〔訳者註〕。

(12) Buchanan 1986: 66. プルニヤー地方のその他のヒンドウー聖地についての記述は、76, 77, 107, 109, 112, 114 頁に含まれる。

(13) AAS, Orme Mss. OV. 9, L. Degloss, 'Journal of the Proceedings, Remarks, and Transactions on the Survey of the Province of Subah Bahar (1767)', p. 21.

(14) AAS, Orme Mss. OV. 6, 'Mustephes Journey', fol. 15.

(15) Anil Chandra Das Gupta 1959: 131; Symson 1715: 293.

(16) AAS, Orme Mss. OV. 6, 'Mustephes Journey', ff. 15-16. Also in Dalrymple 1808, II: 239.

マルコム (Howard Malcom) は、毎年1月におこなわれるこの祭が何千人もの信者たちを集め、中には500~600マイルの距離をやってくる者もいると記している。数日間だけ、数多くの街路、路地、バザールを抱える巨大な都市が出現し、それは「多様な商取引がおこなわれ、最も栄えている都市のせわしさと活気のすべてを兼ね備えた」ものであったという。その泥と水はとりわけ神聖であると考えられ、インド亜大陸の他の地方にいる信者のもとへと何百マイルも運ばれた (Malcom 1840: 5)。

根深い人間の性として「聖なるものを日常の環境から離れた場所に置き、そして、個人的問題や苦しみ (または退屈) を解決する手段を遠くの聖地への巡礼に求める」(Webb 2002: viii) もの、巡礼のためにいつも長距離を旅しなければならないわけではなかった。日々の儀礼には、ガンガーの岸辺を訪れることも含まれていたかもしれない。トワイニング (Thomas Twining) は、川岸の沐浴場とはそういうものであるが、日の出の沐浴場は「いつもの壮観さ」を見せ、それは〔ベンガル西部の〕シャンティプル<sup>ガ</sup>の多くのヒンドゥー教徒にとってすぐ側にある日常であると記している (Twining 1893: 82)。

「聖」地もまた一つの企業体のように組織化されている。聖地はインフォーマルなヒエラルキー構造であり、その中には他の聖地よりも重要性が高い聖地が君臨し続けている。各種の僧侶や関係者が、宗教的重要性をもつさまざまな場所を効率的に運営していた。かれらはまるで実際の企業体や商業組織のように働き、巡礼者の「獲得」に関わり、さまざまな金銭的「寄進」と引き換えに巡礼者へのサービスを提供した。受け身どころか、かれらは並々ならぬ企業心と金銭的な鋭い感覚で、聖地を運営した。かれらはしばしば広大な土地を所有し、現金と現物双方の寄進を受け取り、僧侶、事務官、雑役夫、料理人その他の雇用者としても振る舞った。間接的な経済的利益も大きく、広範な人々が食糧、宿、土産を提供するという活計を得た。大市と巡礼が組み合わせられると、かれらは多数の商品やウシさえも交換する場所を提供した。南インドでみられたように、ベンガルの寺院が金を貸し付けたり、銀行として振る舞っていたかは明言しがたい。とはいえ、地域の社会経済生活における寺院の役割は決して無視しえなかった。

人々は經典、親族ネットワーク、交易関係を通じて、また、僧侶が請け負うツアーを利用して、巡礼地について知るようになった。あるベンガルからの巡礼者がジャガンナート寺院への巡礼にほぼ6ヶ月かかったというのは、<sup>(17)</sup> 明らかに途中で寄り道していたからである。少しだけ寺院にも参拝したことであろう。ジャガンナート寺院は、ベンガル以外の地域でベンガルの人々が最も頻繁に訪れる場所の一つであった。毎年15万人以上が訪れた。<sup>(18)</sup> いつも最初にジャガンナート神に供物が捧げられた。そして、かなりの量のものがきわめて低廉な価格でインド全土から押し寄せた巡礼者に売られた。<sup>(19)</sup> 同寺院はムガル時代には2,000万ないし3,000万ルピー以上の資産を有していた

---

(17) AAS, Bengal Revenue Consultations, P/49/46, 12 July 1774, p. 1869.



(Baharistan-i-Ghaybi, 1936: 36)。地域のさまざまな政治権力が、同寺院を一種の黄金郷<sup>エルドラド</sup>たらしめている莫大な収入を統制しようとした。僧侶が巡礼者を確保するために用いた方法は貿易会社とよく似ている。寺院の職員たちは、しばしば祈りの場ではなく収税局に職を得た方がよいのではないかと勧められるほどであった。かれらは、巡礼者を求めて遠方に部下を送り、そして巡礼者を「団体」で寺院に連れてきた。パンダーと呼ばれる僧侶も同様の役目を持ち、寺院に莫大な収入をもたらしたのである (Peggs n.d.: 11)。

ガヤーでも同様の制度がみられた。「ガヤーワール (Gyawauls)」と呼ばれるガヤーのバラモンは、「ヒンドゥー教が広まっている」地域を行脚し、巡礼者を求めた。巡礼者からの寄進はガヤーワールの財産と考えられていた<sup>(20)</sup>。2人ないしそれ以上のバラモンが「巡礼者を獲得するという事業」において、一種のパートナーシップあるいは共同事業体のような形をとることが一般的であった。巡礼者からの喜捨の分配をめぐる、また、同一の巡礼者から他のバラモンが別途喜捨を要求する——それぞれが「その巡礼者を巡礼する気にさせた手柄」が自分のものだと主張——などして揉め事が絶えなかった。こうした揉め事は、概して収税局<sup>ア</sup>の官吏<sup>ミ</sup>によって解決されたが、かれらの調査はまず懸案の金額全体を差し押さえることから始まり、「かれら自身にその相当部分を割り当て」て終えた<sup>(21)</sup>。巡礼者がガヤーに到着すると、担当の「ガヤーワール」がその巡礼者を市場・商取引税を徴税する監督官<sup>ズ</sup>のもとに連れていき、その巡礼者がおこないたい儀式について説明した。巡礼者と「ガヤーワール」の姓名や儀式が記入された指図書が公印と収税官の署名のもとに作成され、かれらが儀式をおこなうことが承認された。この指図書が手交されるときに税が支払われたが、それは儀式の数と性質によってさまざまであった<sup>(22)</sup>。カッセルズ (Nancy Gardner Cassels) は、ブキャナン (Francis Buchanan, のちに Hamilton) の報告を利用して、次のように述べている。1ヶ所だけで礼拝する「最下層の巡礼者」は 3.5 ルピーを、38ヶ所で祈りを捧げる最上層は 30~40 ルピーを支払った。そして 40ヶ所というのは 40~400 ルピーの間の支出を意味した。統治者やその他の高位の首長たちは、政府に支払う税を除いて、4万~5万ルピーを費すことができた (Cassels 1988: 19-20)。ガヤー巡礼はある人々にとっては必須のことであったため、税金が巡礼者の数を減らすことはなかった。それに加えて、「ガヤーワール」が常に目の前にいたので、同時代の観察者によれば、だれもが「秩序

(18) Pennant 1798: II, 134-37. 1809年にはおよそ 10万人がラト・ヤートラー (Rath Jatra) 祭に参加した。Thenon はインド全土からの約 100万人の巡礼者がジャガンナート寺院でおこなわれる大祭に毎年参加すると述べている (Thenon nd.: 218-19)。Buchanan 1813: 11 も参照。

(19) Pennaut 1798: II, 134-37. *Du Bengale* 1797: 53 も参照。

(20) WBSA, BOR-Sayer, Vol. 2, Pt. 1, 3 Sept. 1790, p. 12. 輸送費が格段に低下するまで、この慣行は 20世紀に入ってもかなり長くつづいた (Vidyarthi 1991: 308-19, esp. 314 を参照)。

(21) WBSA, BOR-Sayer, Vol. 2, Pt. 1, 3 Sept. 1790, pp. 13-14. WBSA, Committee of Revenue, Vol. 45, 6 Sept. 1784, p. 80. Cassels 1988: 20 でも指摘されている。

(22) WBSA, BOR-Sayer, Vol. 2, Pt. 1, 3 Sept. 1790, pp. 14-15.

と規則正しさ」をもって儀式をおこなった。<sup>(23)</sup> 信者が支払う税は、1782年において一人あたり13ルピーほどと見積もられている。<sup>(24)</sup> 課税率は、「聖なる場所の一部」のみを訪れる巡礼者や、ツアー全体を終えた巡礼者など目的によってさまざまであった。<sup>(25)</sup> 1790年のガヤーにおける徴税方法についての報告書によれば、巡礼者が自発的におこなった喜捨がバラモンの取り分になっていた。<sup>(26)</sup> ガヤーで保存されている免状についての記録によれば、1798年にEIC当局は1万7,670通の免状を発行したが、その数は1804年までに3万1,114通に増えていた (Peggs nd.: 45; Yang 1998: 123)。

3万～4万人の信者が訪れる〔現ジャールカンド州〕デーオガルもまた同様の制度が機能していた。かれらの多くは寺院の外で儀式をおこなうことで満足しなければならなかった。何千もの人々が聖なる夜に神を一目拝むこともできずに帰路についた。<sup>(27)</sup> しかし、信者たちがその事実を気にとめる様子はなかった。ある人々にとって、そこまでの道中が寺院内部の聖域で実際に祈ることよりもむしろ重要だったようである。もちろん表向きの目的は巡礼であるが、しばしば旅程は延長され、義務として神殿に立ち寄った後、おそらく多くの人が町やその側で開催される大市の魅力に惹きつけられただろう。こうしたことは18世紀の巡礼を初期のツーリズムと似たものにしていた (Vaporis 1994: ch. 6も参照)。デーオガル<sup>ヤートラ</sup>巡礼旅は、ガヤーやジャガンナートへの巡礼と比べると随意的であった。1780年代に、デーオガルの寺院群の門前通りに9つの関所が設置され、さまざまなレートの税金が課せられたので、<sup>(28)</sup> 参拝者が減少した。<sup>(29)</sup> 審議の後、最終的に総督は、「反対を受けずに」徴税可能な唯一の方法が、決められた額を政府に支払った後の献納品のすべてを主要なゴーサイン〔托鉢僧〕が保持することを認めることであると決定づけた。これ以前に政府がデーオガルで徴税することはなかったが、自発的な献納品のうちの決まった取り分を得ていた。献納品には、高価な宝石や金銀地金も含まれた (Hunter 1965: 146)。巡礼者の寄進額はかれらの「境遇」に比例していると推測されている。<sup>(30)</sup> 1789年には、訪問者数は平年を上回り、5万人に上った。<sup>(31)</sup> その5分の1はベンガルからやってきて、<sup>(32)</sup> 残りは西部やマラーターの諸国家からであった。1791年の見積もり

(23) WBSA, BOR-Sayer, Vol. 4, 6 July 1791, pp. 18–21. WBSA, Revenue Dept. - Sayer, O.C., 15 July 1791, No. 2.

(24) WBSA, Committee of Revenue, Vol. 13, 29 April 1782, p. 347. さまざまな儀式とそれぞれの費用については、WBSA, Committee of Revenue, Vol. 45, 6 Sept. 1784, p. 80も参照。

(25) WBSA, Committee of Revenue, Vol. 21, Pt. I (typed copy), 12 Dec. 1782, pp. 95–100, 140, 144–45.

(26) WBSA, BOR-Sayer, Vol. 2, Pt. 1, 3 Sept. 1790, p. 11.

(27) WBSA, Revenue Dept. -Sayer, O.C., 15 July 1791, No. 2; Hunter 1965: 147.

(28) WBSA, Revenue Dept. -Sayer, O.C., 15 July 1791, No. 2.

(29) WBSA, BOR-Sayer, Vol. 4, 6 July 1791, pp. 18–21. WBSA, Revenue Dept. -Sayer, O.C., 15 July 1791, No. 2.

(30) WBSA, BOR-Sayer, Vol. 2, Pt. 1, 3 Sept. 1790, p. 7.

(31) WBSA, BOR-Sayer, Vol. 2, Pt. 1, 8 Sept. 1790, p. 62.

(32) WBSA, BOR-Sayer, Vol. 2, Pt. 1, 3 Sept. 1790, p. 8.

では約 1 万 5,000 人に減少し、その原因としてインド北部と西部における混乱が指摘されている。<sup>(33)</sup> あらゆる移住が「厳しく禁じられていた」ため、訪問する者は「密か」に移動せねばならなかつた。<sup>(34)</sup> 「ベンガル人は、穀物が高価であるため、全く巡礼の旅に出られなくなった」と 1784 年に観察されているように、<sup>(35)</sup> 旱魃という過酷な時期にはこうした訪問数の減少がみられた。その年の訪問者は概して経済的に苦しかったようでもある。<sup>(36)</sup> 献納品は「並み」であったが、より高いレート of 税金を避けるための策略だったかもしれない。EIC 官吏は以下のように疑った。

強欲であるがゆえに、しばしば貧しいふりをするので、巡礼者たちの境遇について外見の様子から結論を導くのは不可能である。富裕な人々は、ゴーサインが宗教的な畏怖の念に働きかけて、喜捨しようとしている額以上を取ろうとすることをよく知っているからである。盲信と帰依はヒンドゥー教徒の強い特徴であるが、強欲および金銭への愛着はかれらの支配的な感情なのである。<sup>(37)</sup>

森と峡谷を抜ける〔ベンガルから〕デーオガルまでの道中は危険で、いたるところに獣と匪賊が潜んでいた。EIC は 1791 年にデーオガルに武装警察官の組織を設置し、また、盗賊に対応すべく歩兵隊が送られた (Hunter 1965: 147)。EIC という国家にとって、言明された動機とは、「大きな政治目標である宗教的寛容という民族的な特徴を守り、外国人の遊山を奨励することである」。<sup>(38)</sup> 巡礼者が EIC 統治領を通過する旅と献納品に使うことができるのは、一人当たり 20 ルピー以下だったと指摘されている。<sup>(39)</sup> この計算によれば、もし 5 万人の巡礼者が毎年訪れれば、100 万ルピーを下らない金額が落とされることになる。さらに、もしそのうちの 5 分の 4 が外国人であれば、かれらによって毎年持ち込まれる銀が 60 万ないし 80 万ルピーを下回ることがないという計算になる。<sup>(40)</sup> ベンガル暦 1195 年 (1788 年) にビルブム県のザミンダールは神殿に献納された物品の半分を徴収し、換金して 4,084.7 シッカ・ルピーを、そして 1196 年 (1789 年) には 8,463.6 ルピーを得た。「莫大

(33) WBSA, BOR-Sayer, Vol. 4, 6 July 1791, p. 16.

(34) Ibid.; WBSA, Revenue Dept. -Sayer, O.C., 15 July 1791, No. 2.

(35) WBSA, Committee of Revenue, Vol. 45, Sept. 1784, p. 61.

(36) WBSA, BOR-Sayer, Vol. 4, 6 July 1791, p. 17. Hunter 1965: 147 も参照。1791 年に、ある観察者によれば、5 家族だけがあらゆる衣食住の便を享受し、あるいは滞在用に家屋を借り、およそ 100 人が竹に投げかけて身を保護するための毛布をもち、そして、残りの 1 万 5,000~5 万人は付近の木々の下を宿とした (WBSA, Revenue Dept. -Sayer, Original Consultations (Henceforth O.C.), 15 July 1791, No. 2)。

(37) WBSA, Revenue Dept. -Sayer, O.C., 15 July 1791, No. 2. Sieur Luillier, 'A Voyage to the East-Indies', in Symson 1715: 285 では、「かれら (インド人) は極端に金銭に貪欲である」と記されている。

(38) WBSA, BOR-Sayer, Vol. 2, Pt. 1, 8 Sept. 1790, p. 62.

(39) Ibid.

(40) Ibid., pp. 62-63.

な金額」がベンガルから「Byenautpore」に運ばれ、そして、その「塔<sup>パゴダ</sup>で僧侶たちは、巡礼者の資金が枯渇するまで、あらゆる課税をおこなった<sup>(41)</sup>」。ガンガー沿いの地域から半島を横断してインド西部へと聖なる水を運びながら旅する大勢の帰依者の姿が見られ、聖水は高値で売却された<sup>(42)</sup>。ペナント (Thomas Pennant) などの同時代人は、EIC が益する利点にも気づいていた。かれが述べたように、「公共の富を増加させる旅行者が増えれば、政府は、税収の面、借入れの面、要するにあらゆる意味で利益を得る」のだ (Pennant 1798, II: 283-84)。「大勢が集まる」時期には、ゆすりたかりを防ぎ、平穩を保つため、<sup>コレクター</sup>収税官補佐が任命されることになっていた。EIC 官吏によれば、大市を開催するという形での十分な誘因を与えれば、デーオガルはさらに豊かになりえたという<sup>(43)</sup>。

カルカッタのカリガート寺院も人気の聖地であった。史料から明らかなように、その組織は<sup>ジョイント・ストック・カンパニー</sup>株式会社と何ら変わりがなかった。神殿での献納品は 22 分割され、分割された一つ一つは同じではなかった。それぞれの所有者は、自分の分け前に応じて、割り当てられた特定の 1 日や複数の日の献納品を受け取る権利を有していた。こうした寺院への献納品に対する権利をめぐる<sup>(44)</sup>所有者の間で揉め事も起こった。これらの分け前は財産として取り扱われ、相続可能であった。商人から借り入れたり、宝石を抵当に入れるなどして、分け前が購入されることもありえたのである<sup>(45)</sup>。

同様に、北インド第一の聖地 (tirthasthan) であるバナラスはインド亜大陸全土から信者を引き寄せていた。18 世紀にマラーターや他の支配集団が神殿や<sup>ダラムシャー</sup>宿坊の庇護者となった<sup>(46)</sup>。バナラスとガヤーからジャガンナート寺院への、そしてベンガルから同寺院への巡礼ルートは、19 世紀初めの史料が示しているように、保護を名目とした税の徴収で悪名高かった (Prior 1990: 51)<sup>(47)</sup>。より多くの熟練・非熟練労働者を EIC 領内に引き寄せることも、諸税の免除を促進するための手段として検討されていたようである<sup>(48)</sup>。

18 世紀には、寺院の建立が著しく増加した。新たな寺院の分布は表 1 に示されている。寺院建立活動が活発になったのは、ザミンダールやタルクダールなどの在地有力層の手中にある大量の富が敬虔さを誇示する行為に投資されたことを示している。宗教的情熱と物質的目的の両方に刺激

(41) Ibid., p. 64.

(42) Ibid., p. 65.

(43) WBSA, BOR-Sayer, Vol. 2, Pt. 1, 8 Sept. 1790, p. 66.

(44) AAS, Bengal Sudder Dewanny Adawlut, P/154/37, 4 Aug. 1773.

(45) Ibid.; AAS, Bengal Sudder Dewanny Adawlut, P/154/37, 18 Aug. 1773.

(46) 例えば、[南インド・トラヴァンコール王] マールターンダ・ヴァルマ (Martanda Varma) やケーララの<sup>ラージャ</sup>王たちはそのような宗教拠点のパトロンであった (Bayly 1984: 189)。

(47) NAI, Home Public, Vol. 89, 26 March 1788, p. 2200 も参照。

(48) プライアは、補償を受けていた「Moharbhajj」の女王の事例を引用している。女王は自分の領土を通過するベンガル人巡礼者から保護料を徴収していたのである (AAS, Mss. Eur. F 95/II, fol. 62(a))。

表1 18世紀ベンガルにおける寺院の数

年	ヴェイシヌ派 <sup>ベ イ シ ヌ ノ フ</sup>	シヴァ派	シャクティ派	合計寺院数
1700-1720	12	4	2	18
1720-1740	24	22	6	52
1740-1760	18	40	10	68
1760-1780	50	29	8	87
1780-1800	31	23	2	56
各派合計	135	118	28	281

出典：Eaton 1993: 185; Michell 1983: 196-254.

されて、かれらは宗教活動を庇護したのである。

ある地域を旅し、滞在する巡礼者たちは、大いに必要とされている流動資産<sup>(50)</sup>をその地域の経済に注ぎ込んだ上、貨幣の交換比率にも影響力を与えた。例えば、ゴラゴル(Golagore)の商務駐在官<sup>コマーシャル・レジデント</sup>は報告書の中で、貝貨<sup>カウリー</sup>のレートが高く、その結果、交換比率が安定しなかったと指摘した。それゆえ、かれは、織工たちに対して、不足している貝貨を携えてくる旅人の到着を、

全土からの巡礼者が Tribanny に集い、かれらが貝貨を持ちこみ、それが毎年その価格を大幅に下落させるヒンドゥー教の例祭 Maha Baranny が近づくまで<sup>(51)</sup>、

待つよう勧めた。

もし巡礼者に課せられる税が減額されたり、完全に免除されたりするなら、巡礼者が増えることもありえた。別のEIC官吏は以下のように指摘した。

概してこの国は、諸外国からの毎年の正金輸入とわれわれによる生産物の消費によって、もっと大きな利益を手にするだろう。宗教的に巧みに工夫が凝らされ、諸寺院の評判が高まり、そして、

(49) 官吏が述べたように、宗教という「口実」のもとで、その都市〔バナールス〕は全地域の被抑圧者、不満をもつ者にとっての避難所の役割を果たした。それはヒンドゥー世界にとって抗いようのない宗教という魅力に、さらに付け加えられたさまざまな魅力からくるものだった。EIC政府によれば、きわめて首尾よく、このインド内陸部の主要な手工業・商業都市が「公正かつ穏健な政府のもとに」置かれた。他の都市も同じような利点があったかもしれないが、〔バナールスだけが有する〕「唯一の総合的な行楽地としての地位は、確固たるものであり、他に追隨を許さなかった」。この聖地を訪れる無数の帰依者たちには、最初からそこに留まる意図があったわけではない。しかし、EICが期待したのは、退屈な旅の苦労を繰り返すのを嫌がる気持ちから、そもそもそこに駆り立てた宗教心や単なる貧しさから、そして「自分たちの政府よりも賢明で、より良い政府」の存在を経験して、かれらがバナールスに定住するかもしれないということであった(WBSA, BOT-Comm, Vol. 92, 6 May 1791, p. 120)。

(50) 例えば WBSA, Committee of Revenue, Vol. 45, 2 Sept. 1784, p. 58 を参照。

(51) WBSA, BOT-Comm, Vol. 109, 24 March 1794, p. 327.

記録はされないかもしれないが、巡礼者が通る街道でもさまざまな利点を感じられるだろう。<sup>(52)</sup>

それに加えて、奨励さえあれば、これらの場所は「大市ラギアでのように、たくさんの穀物、神像、布などが売りに出されたなら、富が蓄積される貯水池のような場所」となりうるだろう。<sup>(53)</sup> EIC 政府はさまざまな宗教施設の資産に対しても税を課していた。<sup>(54)</sup>

インド亜大陸の18世紀諸国家は、交易活動とそれがもたらす収入に大きな関心をもっていた (Dale 1994: 30–31)。多くの研究者が指摘しているように、支配者たちは、スーフィー廟での〔聖者を称える〕ウルス祭礼の集会やヒンドゥー教寺院への巡礼の際に、そして毎年の決まった巡礼期間に、貢物を集めた (Sen 1994: 28)。巡礼者は国家に莫大な収入をもたらしたので、それは政治的交渉の理由となりえた。例えば、EIC は、バナーラスとガヤーにおいて、とくにマラーターの人々に対して、「恩恵」をあるいは免税の特権を進んで与えようとした。実際に、そうした譲歩によって EIC はカタック地方〔マラーター領のオリッサ〕を獲得した。同地方の獲得は、「会社の利益にとって価値が高く」、〔ベンガルと〔南インド〕カーナティック間のコミュニケーション〕を決定的に円滑にするものだったのである。<sup>(55)</sup> プネー総督代理官マレット (Charles Malet) が考えたように、この戦略とは、

ここ〔プネー〕やナーグプルの宮廷の宗教的な姿勢に〔働きかけるというものであった〕。それは、われわれのカタックに対する狙いをうまく進めるため、閣下の政府を特徴づける寛容さに基づいて、バナーラスやガヤーでかれら〔マラーター〕に免税や恩恵を与えるという手段を通じて可能になりました。この地が与えてくれるものほど、これを実行し、閣下ご自身とその御国の栄光をヒンドゥー世界の中で不朽のものにできる臣下は他にいないでしょう。<sup>(56)</sup>

それに加え、マレットは、交渉によって、「かれら〔巡礼者〕にバナーラスで低利の手形を発行することで、ボンベイにまわす」するために〔その所持金を〕確保できれば、それに優ることはないとも述べている。<sup>(57)</sup> 先にも述べたように、諸税の免除を促進する際に熟練・非熟練労働者を領内に引き寄せることも重視されている。<sup>(58)</sup> アラーハーバード、ガヤー、バナーラスにおいて課されたさまざま

(52) WBSA, Revenue Dept. -Sayer, O.C., 15 July 1791, No. 2.

(53) WBSA, BOR-Sayer, Vol. 2, Pt. I, 8 Sept. 1790, p. 66.

(54) 例えば、著名なアルメニア商人ホージャ (カジャ)・ペトルス (Khawaja Petruse) は、〔ベンガル中部の〕ラジシャヒ (Rajshahi) のザミーンダールから数ビガ (1 ビガ  $\approx$  1/3 エーカー) の免租地 (La-Kharaj) を購入し、Saidabad に聖職者のための回廊を備えた教会を建てた (WBSA, Revenue Dept-Sayer, O.C. No. 5, 20 June 1792)。

(55) NAI, Home Public, Vol. 97, 16 March 1789, p. 1805.

(56) Ibid., pp. 1790–94. これは当時の総督コーンウォリスに宛てた書簡と思われる〔訳者注〕。

(57) Ibid.

(58) WBSA, BOT-Comm, Vol. 92, 6 May 1791, p. 120.

な税について、プライア (Katherine Prior) が詳述しているように (Prior 1990: 50-65)<sup>(59)</sup>、どの統治権力がその地域で優勢であるかにかかわらず、政治的打算と策謀が商取引の本質的な一部だったのである。

18世紀初めの著述として、旅行者ハミルトン (Walter Hamilton) は、「ジャガンナート (Jagarynat) [寺院]」がある国の「異教徒」の諸侯が、毎年 10 万ルピー、すなわち 1 万 2,500 ポンドをムガル朝に貢納し、それがカタックにある国庫に収められていたと指摘している。その諸侯は、巡礼者一人当たり半クラウンを取り立て、その額は毎年 7 万 5,000 ポンドに達した (Hamilton 1995, II: 214)。「Pursottam」の<sup>ラージャー</sup>王がジャガンナート寺院の偶像をなんとか手に入れていた 3 年の間、〔前出の諸侯〕シュジャー・ウッディーン (Shuja ud Din) は毎年 120 万ルピーもの収入を失った。<sup>(60)</sup>〔同地域を征服した〕マラーター勢力は、毎年 30 万ルピーを、<sup>(61)</sup>インド亜大陸全土から、遠くグジャラートやデリーからもジャガンナート寺院を詣でる巡礼者から徴収した。<sup>(62)</sup>デカンから来た信者たちが 6 万ルピーであったのに対して、「一般的により富裕な」ベンガルから来た者たちは 10 万ルピーを支払った。ただし、一行が貧しい場合には交渉の余地があった (Leckie 1800: 13)。カッセルズは、EIC が 1803 年にオリッサを併合した後、19 世紀初めになってようやく巡礼税に関する体系的な政策が導入されたと指摘している (Cassels 1988: 21)。オリッサ地方が EIC によってマラーター勢力から奪われた 1802~4 年頃、巡礼税は、徴税にかかる経費、修理と維持にかかる諸費用、臨時支出を差し引いて、純益で年におよそ 15 万ルピー、すなわち約 1 万 5,000 ポンドもあった (Bacon 1837, I: 179)。1806 年の報告書によると、EIC 官吏はジャガンナート寺院とアラーハーバードで徴収される諸税は年に 20 万ルピーと見積もった。<sup>(63)</sup>

人気のある巡礼地と巡礼路は、宗教活動と税金だけでなく、商業活動の動脈でもあった。例えば、サンニャーシーと呼ばれる遊行僧はこれらのルートを交易ネットワークとして利用した。コーン (Bernard Cohn) は、アラーハーバード、ハリドワール (Hardwar)、ウッジャインまたはナーシクで開催されるクム (クンプ)・メラー [ヒンドゥー教の大祭] とともに、1 月に北インドから始まるサイクルをたどった。3 月に、遊行僧はネパールのジャナクプル (Janakpur) に向かい、その後ベンガルに向かってブラフマプトラ川を渡り、そして 5 月にガンガー河口のシャゴル島に達した。かれらは、6 月末に雨季が始まるまでにはベンガルを発ち、ビハール、北インドを抜けてインド北西

---

(59) WBSA, Committee of Revenue, Vol. 45, 6 Sept. 1784, pp. 81-86 も参照。

(60) 寺院に神像がないために 36 万ポンド (巡礼税) が失われた。その損失は 90 万ルピーとも見積もられた (Ghulam Hussain Salim, *Riyazu-s-Salatin* 1975: 303)。Kulke 1978: 321-42, esp. 334-37 も参照。

(61) AAS, Orme Mss. OV. 71, ff. 53-64, また Dalrymple 1808, II: 408-12。

(62) WBSA, Committee of Revenue, Vol. 37, 16 Feb. 1784, pp. 157-59。

(63) AAS, Bengal Revenue Separate-Dept, L/E/3/15, 21 August 1806, pp. 101-03。

部方面に移動するか、プリーとジャガンナート寺院へと南下した。<sup>(64)</sup>

史料には、行者ファキールとその信仰に基づく旅にも頻繁に言及されている。<sup>(65)</sup> ファキールは、耕作者が税金やその他の「税」を支払い、種子と牡牛を購入し、社会的な義務が果たせるように、信用を供与した。耕作者はしばしば負債を抱え、「サンニャーシー・ファキール」や「金貸し業に従事するバクサル〔ビハールの町〕から来た者たち」から借り入れた。<sup>(66)</sup> 同時代の観察者たちによれば、ある史料では「並外れた乞食」と称されるファキールは、巨大な権威と権力を有し、村々や土地を所有し、金銭的に恵まれていた (*Sketches of India* 1816: 127 参照)。<sup>(67)</sup> ゴーサインやバイラーギー〔托鉢僧〕も、相当な金儲けの才覚をもち、政治権力とのつながりを育てていた。ピンチ (William Pinch) が示唆するように、かれらの成功は、軍事力へのアクセスによるものでもあった (Pinch 1996: 24-26; 1998: 293-33)。<sup>(68)</sup>

サンニャーシーやファキールはインド亜大陸の内外を広範に旅した。国境、言語、あるいはその他の政治軍事体制がかれらの行く手を阻むことはなかった。あるサンニャーシーの「プラン・プリ (Praun Poory)」の旅程から明らかのように、諸王国の国境では、宗教者のみならず商人の自由な往来が可能であった。プラン・プリは、〔北インドの〕カナウジ出身で、総督代理官ダンカン (Jonathan Duncan) がかれに出会ったときにはバナーラスに住んでいた。かれの放浪の旅は、今日のインドの全域や近隣の国々にまでおよんだ (Duncan 1799: 49-52)。かれが最終的にバナーラスに落ち着いたのは、総督ヘイスティングズ (Warren Hastings) が「Assapoor」という村を給与地としてかれに与えたからであった。それは免租地であった。しかし、この大胆不敵な遊行者は、ときおり小旅行を続けた (Duncan 1799: 37-46)。

大市は「網の目のように絡み合う宗教的な諸事」と密接につながり、「経済的・社会的・文化的諸問題」とも深く関係していた (Yang 1998: 117)。<sup>(69)</sup> 商人たちは進んで宗教的な暦に従った。それは農業サイクルとも密接に結びついていた。おそらくそれは、研究者たちがイングランドについて述べ

---

(64) Cohn 1964: 175-82 (とくに 176 頁)。Kolff 1971: 213-18; Bayly 2000:183-86, etc. も参照。この地域におけるサンニャーシーの役割についていくつかの研究がある (Ghosh 1930; Sen 1988; Das Gupta 1992 を参照)。

(65) *Proceedings of the Controlling Council of Revenue at Murshidabad* (Henceforth *CCRM*), Vol. I, 28 Nov. 1770, p. 254.

(66) *Risala-i-Zirat* 1993: 274. 以下も参照。NAI, For. Pol.-Secret, 21 Jan. 1773, p. 11. *CCRM*, V, 1 April 1771, p. 14.

(67) Kabir の詩も参照。「かれらは無私を公言するが、貪欲がかれらの心を掴んでいる。金を身にまとうことで自らの信仰に泥を塗る。かれらは種馬と牝馬を集め、村を手に入れ、そして大富豪のように振る舞う」 (Ghosh 1930: 13 で引用されている)。

(68) ゴーサインやバイラーギーが率い、「ナーガ (naga)」戦士〔武装した修行僧兵〕で構成された堅牢な軍勢は、北インドの主要諸国家 (アワド太守<sup>ナワーブ</sup>、ジャイブルのカッチェワーハー・カーストの<sup>マハラージャ</sup>王、<sup>マハラージャ</sup>バーラトプルのジャート・カーストの<sup>マハラージャ</sup>王) の軍でも戦った。Kolff 1990 も参照。



ているように、大市が開催される日を人々の記憶の中にとどめる方法であり、大市の日は農民や織工が日々の予定から離れて小休止するタイミングでもあった。それに加え、大市は季節や場所を変えて開催され、遠方や近隣から大勢の人々を引き寄せた。売りに出される商品の種類が訪問者の数を左右した。大市は、特定の神を祀り、讃えるためだけに開催されるのではなく、文化的かつ商業的な交換の空間としての役割も果たした。常設市場がない地域では、こうした場こそが人々がさまざまな商品を手に入れることができる唯一の機会となった。それらは既存の市のネットワークに適合しえたが、中心地が作りだすパターンから逸脱することもあった。同時代人たちが指摘したように、街道が、富者と貧者の双方を含み、老若男女が渾然となった旅人の集団に何マイルにも渡って埋めつくされた。「商業的利益への期待や、大市にとまなう人々の往来は、俗物にとって、信心深い者<sup>(70)</sup>にとっての清めの儀式と同じくらい魅力的であった」(Bevan 1839, II: 225)。そして、「宗教的義務の履行はかれらの第一の目的であるが、多くの者がその機会を利用し、商取引に参加し、年に一度の大商いを展開した」(Hardwicke 1801: 312-13)。

大規模な大市は、巡礼の中心となる主要な（そして副次的な）場所で毎年開催された。例えばハリドワールでは、15年ごとに

クムと呼ばれる巨大な大市が開かれる……世界中から集まる群衆の数たるや凄まじく……（そのため）集まったさまざまな種類の硬貨の中には、ドゥカート、ルーブル、そしてピアストル（も<sup>(71)</sup>あった）(*Sketches of India* 1816: 52 fn.)。

新たな大市の誕生は、明らかに商業の発展を受けてのものであった。これらの大市<sup>メーラー</sup>は、毎日あるいは毎週開催される市とは区別される。[エプステイン (S.R.Epstein) が中世ヨーロッパについて指摘するように、] 後者では、些細な小売りが中心であり、「商業という車輪に油を差す程度であり、[商業という] 装置を修正するようなものではない」(Epstein 1994: 459-82, esp. 461)<sup>(72)</sup>。大市は、商業との関係を築くために必要な固定費を支払うことができはじめて生き残ることができた。長期的

---

(69) 文化人類学者が描きがちであるが、これは南アジア特有の現象というわけではない。「これらの行楽地（巡礼中心地）は、ヨーロッパ大陸で毎年開催される大市のように、ヒンドゥスタン (Hindustan) のあらゆる産品の市でもある」(AAS, Mss. Eur. F 95/II (Miscellaneous papers of Lt-Col Robert Kyd), fol. 62(a))。この点について、Munro 2001: 14 も参照。

(70) マラバル、ハリドワール、ジャガンナートにおける大市に関わる喧騒について、ベヴァンは興味深いコメントを残している。Bevan, 1839, II: 225-34 を参照。

(71) 約6万の人々が大市に集まった。「ペルシア、タタール、シェーク (Seiks)、そしてインド各地から集まった地元のジャート、ローヒラー、Greekers などの人々のるつぼまで、その実態たるや、どんな素晴らしい想像力をもってしても思いつきもしないようなものである」(*Sketches of India* 1816: 80)。

(72) Munro 2001: 32 も参照。

には、取引の量（すなわち大市設立の限界利潤）が増加する場合、あるいは、初期の設立費用と継続的に発生する組織運営費用が低下する場合にのみ、定期市の数は増大するのである（Epstein 1994: 462）。理論化された中世ヨーロッパの定期市の事例が、もちろん直ちに本研究の対象地域に適用できるわけではない。しかし、ベンガルで多くの大市が開かれているとすれば、この時期における増加は商業機会の増大の反映でしかありえない。すなわち、ベンガルでさえ上記のことが当てはまるといえよう。これらの大市は、もし経済的に成功しなければ、そして利益が設立と維持にかかる費用を超えなければ、存続できなかった。

大市は徐々に増えていった。しかし、数年しか続かない短命なものもあり、新たなものにとって代わられたとしてもはかない運命であることも多かった。しかしながら、多くのものはしばしば何世紀もの間、時には今日に至るまで存続した。商取引がなかったり、衰退していたなら、どんな大市も長く生き残れない。したがって、それらの存在は、明らかにそれを支えうる経済の強靱さを示している。おそらくこうした大市の圧倒的多数は小さく、せいぜい近隣の村々から人々を集めたにすぎない。それらは、定期市が開催される場所や神殿がある場所で開かれることが多く、また、こうした小規模の大市は「典型的には、少なくとも定期市の市場圏を包含する地域を対象とした」が、場合によっては「より広い地域を対象としたであろう。というのも、これらは週に一度ではなく、年に一度開催されるものだったからである」（Yang 1998: 126）。

特定のヒンドゥーの神々や、ムスリム（Mahomedans）によって聖人と称えられる人々の祝祭に際して、多数の人々がとくに神聖であると考えられる場所に集まり、そして、商人は、自分の売り物の市場を見つけられる機会に便乗し、群衆が望むものを提供した（Hamilton 1828: 187）。

大市で売買される商品は多様であり、大市の組織は無秩序からはほど遠かった。大市の繁栄は、開催される場所の支配層の能力、すなわち、かれらが商業活動を行う商人の活動と往來の安全を確保できるかどうかにかかっていた。商人は、安全が保障されなかったり、詐欺などの行為に地域の支配層が対応しない場合、その地域に商品に移入しなかったであろう。庇護者には、法と秩序の維持が求められた。中近世期には世界中のいたるところでみられたように、計量、価格、買い占め、あるいは個人的確執をめぐって揉め事が生じた。ベンガル商人は、自分たちの利益を守るために協力することで知られ、こうした大市においても似たような内部組織が機能していたに違いない（Moore 1985: 93-97）。在地支配者の一族は、大市、寺院やモスクの設立と支援に関わっていた。同様に、かつての支配者一族の官吏たちは、大市の立ち上げに携わり、「それによって同地のすべての旅人、恵まれない人々、貧しい住民に益する」ようにした。<sup>(73)</sup> 大市がどのように運営されたか明らかにすることは

---

(73) WBSA, Revenue Dept-Sayer, O.C., 1 July 1796, No. 2, pp. 4(b) -5.

難しいが、大市の円滑な運営を確実にを行うため、同じような官吏や清掃人の存在が明らかになっている定期市が模倣されたと言ってもよいであろう。定期市と同じく、大市設立許可を求める請願がなされ、国家によって勅許状が与えられた。そして、それは「小作人や市の人々の暮らしにゆとりと幸福を付け加えた」のである。市の創設者によって通例の税が課せられ、それを利用して「そこを往来する人々や困窮者の利便性と快適さを増す<sup>(74)</sup>」ことが期待された。しかしながら、疑いようもないことに、これらの大市に関係した人の数は膨大であり、それゆえにそこで展開された商取引も大規模であった。売買される商品に加え、村や町は、宿泊場所、娯楽、飲食の提供で潤った。地元住民は大市にやってくる人々に生活必需品を提供した。

ブキャナンは、〔ベンガル北東部の〕チルマリ (Chilmare) 近くのブラフマプトラ川の岸辺で開催される大市では、年間 4 万～5 万ルピー相当の商品が売られていると述べている。<sup>(75)</sup>〔ベンガル北東部の〕ロングプル (Rangpur) で開催される年 1 回の大市には、「Botea」のような遠隔地からも人々が訪れ、かれらが輸入する馬やその他の商品目当てに多くの人々が集まった。そこには、カルカタ、ムルシダバード、その他から持ち込まれた羊毛製品が供給された。<sup>(76)</sup>1774 年の、ある文書には、コチ・ビハール (Cooch Bihar) における戦争のために中断されていたが、「Boutans」が毎年ロングプルに隊商を送ることを決定したと知らせてきたと記録されている。大市を監督するために慣習的に監督官が任命された。監督官は、商人を保護するほか、秩序だった売買を維持し、輸移入された商品に対する政府の税を賦課した。12 月にマスタングル (Mastan Garh) の〔ムスリムの〕聖者廟で開かれる大市には大勢のファキールが集まった。<sup>(77)</sup>「シャベ・バラート (Shab-i-barat)」か「ズルヒッジャ (Zilhajh)」の月 (乾季で決まる) には、〔ベンガル東部の〕パンドウヤ (Pandua) のハズラト・マクドゥーム・シャー・ジャラルール・タブリーズ (Hazrat Makhdum Shah Jalal Tabriz) 廟とハズラト・ヌール・クトゥブルアーラム・バンガリー (Hazrat Nur Qutub-l-Alam Bangali) 廟の付近で大市が開かれ、<sup>(78)</sup>何十万もの人々が訪れた。かれらは、フウグリ、シレット、ジャハンギルノゴル (ダカ) などから 15 日～20 日かけてやってきた (Ghulam Hussain Salim, *Riyazu-s-Salatin* 1975: 46 参照)。〔ビハール東部の〕プルニヤーの「Nekmund」の大市も同様に、1,500 人ほどの群衆が祈り、かつ「歴史と大市での利益を楽しんだ」(Buchanan 1986: 85, 193)。プルニヤーの Manihar 地区南西端の「Jotnarahari」では、2 日から 4 日間おこなわれる「集会」が毎年 4 回あり、各集会には 1 万～1 万 2,000 人の男女が集まった。「無法者」はもちろん、多くの商人もそこに向かった (Buchanan

---

(74) Ibid., pp. 4(b)–5(b).

(75) CSSSC, Mss. Eur. D 75 (mf), Book V, fol. 94.

(76) NAI, BPC (mf), 15 Feb. 1742, p. 66. 「Botea」はチベットからブータン、インド北東部の地域を指し、「Boutans」はそれらの地域の人々と思われる〔訳者註〕。

(77) CCRM, Vol. IV, 7 March 1771, p. 59. Firminger 1913: 175.

(78) WBSA, BOT-Comm, Vol. 102, 18 Feb. 1793, p. 549 も参照。

1986: 114)<sup>(79)</sup>。ブキャナンは、1810年には40万人ほどが15年に一度開催される「大集会」に参加したと述べている。ブキャナンは以下のようにも記録している。

〔ガンガー源流にほど近い〕ガンゴトリー (Gangotri) から〔ガンガー河口の〕シャゴル島までの、あらゆる主要な沐浴場も混雑していた。目に入ってきたのは、何千もの人が、そこで執りおこなわれる儀礼のために、せいぜい無益で、役にも立たない押し合いへし合いの馬鹿騒ぎをしているという、きわめて哀れな惨状であった。かれらは、幼児、病人、年寄りの親族を苦痛に晒し、多くがそのためにその場で行き倒れた。健康な者でさえ、病に臥してしまうような苦難に苛まれた。さらに多くの者が、自分の仕事や金使いに無頓着になり、経済的困難に陥っていたのである (Buchanan 1986: 114)。

〔ビハールの〕パワーニープル (Bhawanipur) の大市は、4月に10日間続き、群衆を引き寄せた。そこには泥棒、楽師、大道芸人、見世物師、托鉢僧が集まった。一般的に、かれらが短期の大市に集まる人々の相当部分を占めるが、漫然と過ごすだけの人々、信仰心の厚い人々、はるかブータンやネパールなどを含むさまざまな地域からやってきた商人、そして、よりふしだらな楽しみを目的とした人々や娼婦の周旋人もいた (Buchanan 1833: 32)<sup>(80)</sup>。このように聖地を訪れる人々が、周辺の大市で提供される商品を直接消費するだけでなく、旅の土産を、以下のように持ち帰ったということも心に留めておかねばならない。それらは、真鍮や銅製の道具 (Bayly 2000: 127-29)、原料を搾り取った残りの種、完成品である製品といった形で運ばれ、最終的には目的地の市場で売却されて買い手に渡った。したがって、これらの旅に関連した製品は、手工業技術を発展させ、貨幣の使用を必要とする職人や商人の活動を助長したのである。〔チッタゴン近郊の〕「シタクンド丘陵 (Seetacoon Hill)」近くの「燃える岩」の近くに住む僧侶の中には、石を彫って偶像を作り、ベンガルで売るために送り、相当の利益を上げた者もいた (Schendel 1992: 19)。同時代の著述家は、18世紀末葉から19世紀初めにかけて名が知られるようになった数多くの聖人の一人 Gorachand Shah を記念して開かれたものをはじめとする大市について記述している。参加者は5万人に達することもあり、「大市と市」が開かれ、そこにはさまざまな種類の商品が持ち込まれ、販売された (Das Gupta 1959: 132-33)<sup>(81)</sup>。

こうした大市の数は、表2が示すように、決して取るに足らないものではなかった。表2によれ

---

(79) 大市に関するその他の記述は、NAI, Home Public, Vol. 91, 28 April 1788, p. 3432 も参照。巡礼者は「Soorjoo」川とガンガーの合流点を訪れ、そこには常設市<sup>バザール</sup>があった。そこで徴収された諸税の詳細なリストについては pp. 3467-524 を参照。

(80) Banerjee 1987: 1197-206 も参照。

(81) 19世紀初めに開かれた他のいくつかの大市については Das Gupta 1959: 208-10 を参照。

表2 大市の数とその歴史の古さ

古さ (年数)	ベンガル西部における大市の数
太古の昔から	94
古代より	257
700-800 年	5
500-600 年	13
400-450 年	18
300-350 年	29
250 年	27
200 年	97
合計	540

出典：Mitra 1968 より筆者が集計（ただし、比較的  
重要でない大市、また 18 世紀以前に途絶えた  
もの、18 世紀以降に始まったものは除いた）。

ば、18 世紀において大市数には増加がみられたようだ。大市の地域分布は一様ではなかった。<sup>(82)</sup>〔ベンガル西部の〕ミドナプル地方 (Midnapur) における大市の数や、〔ベンガル東部・北東部〕ブラフマプトラ川の岸辺で開かれる大市の数が著しく多いことは、市や大市が開催される場所と多様な地理的環境が交わる境界地域との間に強い相互連関があるといえるかもしれない。すなわち、ある地域のだ真ん中にあるよりも、自然環境の変わり目にあたる地域でより多くの市が開催されたのである。ミドナプルなどの地域は 18 世紀に「開かれ」ていったことも指摘されねばならない。これらの地域では、市はまだ根付いていなかったが、大市は、限られた規模とはいえ大いに商取引を促進していただろう。ブリトネル (Richard H. Britnell) が指摘するように、大市などの認可そのものがある村や町で継続的な交易が始まったことを意味するわけではないが、正式に認可されるほどの規模の交易がすでにあったことを示唆しているのである (Britnell 1981: 209-21, esp. 216)。

もちろん、こうした大市はベンガル特有のものではなかった。バナーラスの大市は 250 万もの群衆を引き寄せた。<sup>(83)</sup>17 世紀においてさえ、同時代人は次のように書き留めた。

何百万もの人々がインド諸国からそこ（バナーラスおよびジャガンナート寺院）を訪れる。かれらは

(82) これらの大市のうち多数は、西ディナジプル (43 ヶ所)、ムルシダバード (86 ヶ所)、ノディヤ (44 ヶ所)、ハオラ (45 ヶ所)、フウグリ (91 ヶ所)、チョビシユ・ポルゴナ (68 ヶ所)、ミドナプル (128 ヶ所) 各県で開催された (Mitra 1968)。

(83) さまざまな「給水所」で誰もが少額を支払った。そして、その徴収係は、「警察を監督するマハント (ヒンドゥー教宗教組織の長) に帳簿を提出するため、かくも人の出入りが激しい場所で正確な登録簿を作成せねばならなかった」(Hardwicke 1801: 312)。「多くの者がこの機に乗じて商取引を行い、年に一度の商売を行うのだ……かれらの中にははるか遠く (カーブル、カシミール、ラーホール、プータン、シュリーナガル、クマーウーン、そしてヒンドゥスターン平原) から [やって来る者もいた]」(Hardwicke 1801: 312-13)。

自分たちの偶像を威風堂々と掲げて進み、あらゆる種類の迷信的行為をおこなう。かれらは、かれらから利益を得ようとする大勢のバラモン (Bramens) にもてなされるのである (Sen 2011: 96)。

〔南インドの〕「ティルパティ (Tripetty)」で毎年 10 月に開催される例祭には、デカン高原産の馬とマンナール地方のラクダの市が立<sup>(84)</sup>った。

大市は社会的なコミュニケーションの場でもあった。思想や情報がおそらくはマーケティングという経路を通じて拡散された。決まった日程で各地を旅する行商人、職人、占い師をはじめとする各種サービス提供者は外の世界のニュースをもたらし、そして、かれらが切り開いた道に遊行僧サンニャシーのような他の旅人がつづいた。より正確には、かれらはあくまでも部分的な非商業目的の旅人と分類されよう。というのも、かれらは金貸しもするし、大規模に商取引もおこなっていたからである。全体的な印象として、ベンガルの大市はよく組織されていた。入念に準備され、実施計画が練られているため、首尾よく運営された。<sup>(85)</sup> 同時代に描かれた絵画が示しているように、余興もよく組織され、大市の重要な構成要素となっていた。その画家は、踊り子、楽師、曲芸師、玩具売りの姿を生き生きと描いている。

旅人や商人が、休息所、飲料水、そして地域の支配層が保証する安全な通行といった基本的な設備がなければ、旅に出ることはなかつただろう。地元社会のあらゆる階層が、宗教的義務感と物質的な欲望に後押しされて、旅行者の福利厚生に関わ<sup>ナージュム</sup>った。太守やとりわけ在地有力者は、街道と宿屋の維持に積極的な役割を果たした。地元の住民も、常雇い、臨時雇いを問わず、ダム、堤防、溜池、橋、そして街道のような公共の施設の建設や維持に貢献した。<sup>(86)</sup> すなわち、在地有力者、他の富裕層、多くの宗教関連機関、家主、そして一般の村人——すべてがこのネットワークを支援したのである。ベンガルの「村の寄合い所 (choubaries)」では、食料がバラモンや他の托鉢僧らへ金銭的な見返りなしに配給された (Buchanan 1807, I: 15)。アカーラー (運動場またはレスリング<sup>ピット</sup><sup>(87)</sup>場) は、ダカなどの都市では宿屋と同様の機能を果たした。<sup>(88)</sup> 旅行者は井戸やモスクの近くで夜を過

---

(84) アウランガーバードとグジャラートで生産される大量の錦織と絹製品がその他の反物とともに隊商でデカンから運ばれた。それらは、下カーナティックの繊維製品と交換された。「ティルパティ (Tripetty)」には遠方の諸地域から大勢の人が集まるが、それは「宗教的原則」に従っていた。そして、インドの他地域においても「まさにこの強烈に人々を惹きつける力が同じような利益を生んでいた」(WBSA, BOT-Comm, Vol. 92, 6 May 1791, p.107)。Subrahmanyam 2001: 22–60 も参照。

(85) 多くの楽師と踊り子の一団と高い階層の参加者のテントがある大市の図。裏面には鉛筆とインクで「ヒンドゥー大市」、1790–1800 年、ハイド・コレクション、水彩画、ムルシダバード派、と記されている (AAS, PDP, Add. Or. 3228)。

(86) Colebrooke 1884: 46; CSSSC, Mss. Eur. D 75 (mf), Book V, fol. 144.

(87) 禁欲的苦行の文脈では、アカーラーは武装した行者の一団や軍事的性格をもつ僧院のようなものである (Pinch 2006: x)。

ごすことができた。<sup>(89)</sup>モスクやスーフイーの諸施設の敷地内にある小屋も同様の機能を果たした。<sup>(90)</sup>支配層は、旅人に食料品などの必要物資を供給するという特定の目的のために、免租村や免租地を取り上げた。<sup>(91)</sup>ザミーンダールも巡礼者に食料と宿を提供した。<sup>(92)</sup>もし街道のそばに集落がなければ、村人が旅人に穀物を売るために関所<sup>チヨウキ</sup>までやってきた。<sup>(93)</sup>宿駅<sup>カライ</sup>も存在していたが、<sup>(94)</sup>それらは概して、〔河川路が発展した〕ベンガルとは異なり陸路での旅が一般的な北インドとデカンに多かった（Colebrooke 1884: 55）。これは単なる推測であるが、おそらく宿駅や休憩所、酒場が提供したのは、避難所（宿駅や休憩所の場合）あるいは懇親のための場（酒場）のみならず、商談をおこない、契約を結び、顧客と会い、<sup>(95)</sup>情報を交換し、取引相手を見つけだすための場でもあった。

#### 4 結論

旅が経済にもたらす恩恵は——さまざまな課税や財政上の利害によって直接生みだされる歳入という面でも、そして、旅人が消費者となるという副産物によって間接的に地元経済が活性化されるという面でも——広く認められていた。神殿や僧院は、商業組織と同じように組織され、地元の経済的繁栄に寄与した。巡礼者は、効率的な輸送システム、宿泊施設、そして食料を必要とした。これらの経済的含意は明白であった。神殿の管理者たちにとって、それは収入を生み出す事業であった。宗教関連者は、政治的・経済的圧力や飢饉をとまうこの移行期において決定的な役割を演じ、新たな形での権力と庇護の拠り所となった。土地所有者と商人は、しばしば大勢の従者とともに巡礼の旅に出た。こうした旅は先行する数世紀におけるものよりも大規模で、かれらへの食糧供給、豪

---

(88) 例えば、クリシュナ神の信者はダカへの短期訪問の間そこに滞在した。陸路の旅行者はこれらのアカラー<sup>カラー</sup>や穀物商の店に下宿した。多くのヒンドゥー教徒の織工もアカラーに滞在した。かれらは下宿代として一定額の日払いまたは月払いで〔托鉢僧の〕バイラーギーに支払った。通常は1日1アカで、それで2食分提供された（Taylor 1840: 294-95）。

(89) ‘Route from Poonah’, in Dalrymple 1808, I: 483.

(90) WBSA, Committee of Revenue, Vol. 24 (typed copy), 7 April 1783, pp. 292-94; Vol. 31, Pt. 1 (typed copy), 7 Aug. 1783, pp. 28-35.

(91) WBSA, CCR, 27 Sept. 1774, pp. 85-86.

(92) CSSSC, Mss. Eur. 74 (mf), Book III, fol. 182.

(93) ‘Route from Poonah’, in Dalrymple 1808, I: 494. あるフランス人は次のように詳述している。「ベンガルには旅行者が宿泊する「オテルリ (hoteleries)」はなかったが、誰かしら敬虔で慈悲深い人が自分たちのことが記憶に残るように建てた、屋根付きの避難小屋のようなものは見つけられるだろう。旅行者が道中でパンやその他の食料を手に入れるのはとても困難であった」（Schouten 1707, I: 248-49）。

(94) AAS, Orme Mss., OV. 41, ‘The Road from Cassimbazar to Rajemehal’, ff. 117, 121 には、カシムバザルとラージマハルの間の街道沿いにあった、Dewan Sarai, Rani Sarai, Ninghen Sarai, Balakishen Sarai など宿駅が列挙されている。

(95) 例えば Kohn 2003 を参照。

華な儀式、バラモンへの施しに莫大な富が費やされた。これは、この時期の北インドにも共通してみられた。ベンガル各地から、そしてさまざまな階層の人々が、巡礼の旅に出かけ、おそらくは敬虔な信者を装いながらの娯楽目的の旅も楽しんだ。それはツーリズムの萌芽的な形と呼ぶうるかもしれない。さまざまな宗教者の一団が、地域内の、あるいはより大きな宗教拠点の神殿を訪問したが、それは、いずれにせよ村または町の外へ移動したことになる。巡礼の道中、有名な場所、歴史的な遺跡などを描いた素敵な絵画や——もっともおそらくは土産物産業であるが——、禁欲や清めといった目的とはほとんど関係がない集団と化してしまう巡礼者たちの存在、そして、街道沿いの宿駅サライにおける売買春などの行為や市に楽師や大道芸人による娯楽をともなう巡礼のあり方は、「庶民文化」の形成に向かう動きを示唆しているのであろう。同じことは、近世日本にも当てはまる。巡礼者は、苦難と危険に耐えたかもしれないが、かれらの旅は苦行であるだけでなく、新しい土地や人々に出会い、物語を聞き、異なる考え方や暮らしぶりを経験するというバカンスでもあったのだ。文化的規範と物質文化はこうして拡散した。この「神聖なる贅沢」の経験は、ベンガル社会を理解する上での新たな指標ともなりうる。ベンガルでは、従来の18世紀ベンガル史家が考えてきた以上に消費が広範囲におよんでいた。18世紀に商品経済が成長したとき、商人や土地所有者だけが豊かになったのではなく、社会のより広汎な層にも利益が行き渡ったのである。

研究者たちが中世ヨーロッパ史の文脈において指摘しているように、巡礼と商業は同一のインフラストラクチャを利用してきた。同じルートを通り、巡礼の中心地は交易の中心地も兼ねる。巡礼者を兼ねた商人が存在する。そして、主要な巡礼地は資源だけでなく人々を動かし、それには価値ある特殊な商品だけでなく信仰に関わる品物の移動をともなう。旅がベンガルの社会の、かくも重要な部分であるにもかかわらず、ヨーロッパ人の旅行記では、この国内の旅はときどき言及されるのみであり、経済活動についての記述もどちらかといえば貧弱であった。前述のように、主要な交易品はリスト化され、それにはカルカッタの壮大さを含む主要な町についての寸評、ヨーロッパ各国東インド会社の盛衰が付されたが、商人が利用しうるような情報はなかった。しかし、Dym (2004: 155-91) が指摘したように、旅行記には「地図作成的な表現」という重要な役割があり、それはベンガルの事例にみられたように、実際の地図の形式ではなく文章によって地図情報が表現された。スブラフマニヤム (Sanjay Subrahmanyam) は、1350年以降のアジアにおける「近世性」アーリー・モダニティを議論し、また、可変的な特徴をもつ世界規模の転換をみてとる。その鍵となる変数は、数値化された旅という文化と独立したジャンルとしての旅行記であり、それらはともに増加した (Subrahmanyam 2001: 251, 261-63)。これらの記述は、ベンガルの事例にみられたように、世界規模・インド亜大陸規模双方を含む交易、都市と人口の成長、海上ルートを通じた遠隔地間のつながり、新しい作物の導入を含む農業の拡大、強力な国家と移動、それらすべてにおいて規模が大きく変容したことを反映しているのである。



## 参 考 文 献

- Alam, Muzaffar and Sanjay Subrahmanyam. (2007): *Indo-Persian Travels in the Age of Discoveries, 1400–1800*. New Delhi: Cambridge University Press.
- Bacon, Thomas. (1837): *First Impressions and Studies of Nature in Hindostan embracing an outline of the voyage to Calcutta*. Vol. I. London: W. H. Allen and Co.
- Baharistan-i-Ghaybi* of Mirza Nathan. (1936): *A History of the Mughal Wars in Assam, Cooch Bihar, Bengal, Bihar and Orissa during the reigns of Jahangir and Shahjahan*. English trans. M. I. Borah. Gauhati: Dept. of Historical and Antiquarian Studies.
- Banerjee, Sumanta. (1987): ‘Bogey of the Bawdy Changing Concept of ‘Obscenity’ in 19th Century Bengali Culture’. *Economic and Political Weekly*. 22. 29: 1197–206.
- Barbosa, Duarte. (2002): *The Book of Duarte Barbosa. An Account of the Countries Bordering on the Indian Ocean and their Inhabitants, written by Duarte Barbosa and completed about the year 1518 A.D.* Vol. II. Ed. Mansel Longworth Dames. Reprint New Delhi and Madras: Asian Educational Services.
- Bayly, C. A. (2000): (1<sup>st</sup> published.1983). *Rulers, Townsmen and Bazaars: North Indian Society in the Age of British Expansion, 1770–1870*. Indian ed. Delhi: Oxford University Press.
- Bayly, Susan. (1984): ‘Hindu Kingship and the Origin of Community: Religion, State and Society in Kerala, 1750–1850’. *Modern Asian Studies*. 18. 2: 177–213.
- Benton, Lauren. (2010): *Search for Sovereignty: Law and Geography in European Empires, 1400–1900*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Bernier, François. (1916): *Travels in the Mogul Empire, AD 1656–1668*. trans. Archibald Constable, 2<sup>nd</sup> ed. Revised by Vincent Smith. London: Oxford University Press.
- Bevan, H. (1839): *Thirty Years in India or A Soldier’s Reminiscences of Native and European Life in the Presidencies from 1808–1838*. Vol. II. London: Pelham Richardson, Cornhill.
- Bowrey, Thomas. (1993): *A Geographical Account of Countries round the Bay of Bengal. 1669 to 1679*. Ed. R. C. Temple. Cambridge: Printed for the Hakluyt Society, MDCCCXCV. Reprint New Delhi, Madras: Asian Educational Services.
- Britnell, Richard H. (1981): ‘The Proliferation of Markets in England. 1200–1349’. *Economic History Review*. 34. 2: 209–21.
- Buchanan, C. (1813): *An Apology for Promoting Christianity in India*, London: Cadell & Davies.
- Buchanan (afterwards Hamilton), Francis. (1807): *Journey from Madras etc. through the Countries of Mysore, Canara and Malabar*. Vol. I. London: printed for T. Cadell and W. Davies booksellers to the Asiatic Society; and Black, Parry, and Kingsbury booksellers to the East India Company; by W. Bulmer and Co.
- . (1833): *A Geographical, Statistical and Historical Description of the District, or Zila of Dinajpur, in the Province, or Soubah, of Bengal*. Calcutta: Asiatic Society.
- . (1986): *An Account of the District of Purnea in 1809–10*. rp. Delhi: reprint Usha Publication.
- Cassels, Nancy Gardner. (1988): *Religion and Pilgrim Tax under the Company Raj*. New Delhi: Manohar.
- Cohn, Bernard S. (1964): ‘The Role of the Gosains in the Economy of Eighteenth and Nineteenth-Century Upper India’. *Indian Economic and Social History Review*. 1. 4: 175–82.
- Colebrooke, H. T. (1884): *Remarks on the Husbandry and Internal Commerce of Bengal*. rp. Calcutta: Printed at Statesman Steam Printing Works.

- Coriate, Thomas. (1616): *Traveller for the English VVits: Greeting, From the Court of the Great Mogul, Resident at the towne of Asmere, in Easterne India*. Printed by W. Iaggard and Henry Featherston.
- Dale, Stephen F. (1994): *Indian Merchants and Eurasian Trade, 1600–1750*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Dalrymple, A. (1808): *Oriental Repertory*. Vols. II. London: Printed by G. Bigg.
- Das Gupta, Anil Chandra. (1959): *The Days of John Company - Selections from Calcutta Gazette, 1824–1832*. Calcutta: Superintendent, Government Printing, West Bengal.
- Das Gupta, Atis K. (1992): *The Fakir and Sannyasi Uprisings*. Calcutta: K. P. Bagchi.
- Du Bengale et des Autres Possessions Anglaises Dans l' Inde*. 1797. Paris: Chez DuPont, An V.
- Duncan, Jonathan. (1799): 'An Account of Two Fakeers with their Portraits'. *Asiatick Researches*. V: 37–48.
- Dym, Jordana. (2004): 'The Familiar and the Strange: Western Travelers' Maps of Europe and Asia, ca. 1600–1800'. *Philosophy & Geography*, 7: 2, 155–91.
- Eaton, Richard M. (1993): *The Rise of Islam and the Bengal Frontier, 1204–1760*. Berkeley, London: University of California Press.
- Epstein, S. R. (1994): 'Regional Fairs, Institutional Innovation, and Economic Growth in Late Medieval Europe'. *The Economic History Review*. 47. 3: 459–82.
- Faruqui, Munis D. (2012): *Princes of the Mughal Empire, 1504–1719*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Finn, Margot. (2006): 'Colonial Gifts: Family Politics and the Exchange of Goods in British India, c. 1780 –1820'. *Modern Asian Studies*. 40.1: 203–31.
- Firminger, W. K. (1913): 'Two letters of Major James Rennell'. *Journal and Proceedings of Asiatic Society of Bengal*. ns Vol. IX: 173–75.
- Fisher, Michael H. (2004): *Counterflows to Colonialism. Indian Travellers and Settlers in Britain. 1600–1857*. Delhi, Ranikhet: Permanent Black.
- Fitch, Ralph. (2005): *Here beginneth the Voyage of Master Ralph Fitch, Merchant of London, by the way of Tripolis in Syria to Ormus, and so to Goa in the East India; to Cambaia and all the kingdoms of Zelabdim Echebar the Great Mogor; to the mighty river Ganges and down to Bengala; to Bacola and Chonderi; to Pegu; to Imahay in the kingdom of Siam and back to Pegu, and from thence to Malacca, Zeilan, Cochin and all the coast of the East India. Begun in the year of our Lord 1583 and ended 1591; wherein the strange rites, manners and customs of those people, and the exceeding rich trade and commodities of those countries are faithfully set down and diligently described by the aforesaid Master Ralph Fitch in The First Englishmen in India. Letters and Narratives of Sundry Elizabethans written by themselves and edited with an introduction and notes by J. Courtenay Locke*. London: George Routledge & Sons, 1930. Reprint London & New York: Routledge Curzon.
- Fletcher, Joseph. (1985): 'Integrative History: Parallels and Interconnections in the Early Modern Period, 1500–1800'. *Journal of Turkish Studies*. 9: 37–57.
- Ghosh, J. M. (1930): *Sannyasi and Fakir Raiders in Bengal*. Calcutta: Bengal Secretariat Book.
- Glanius. (1682): *A Relation of an Unfortunate Voyage to the Kingdom of Bengala*. London: Printed for Henry Bonwick at the Red-Lyon in St. Paul's Church-yard.
- Grandpre, L. De. (1995): *A Voyage in the Indian Ocean and to Bengal, undertaken in the years 1789 and 1790*. Vol. I & II. London: Printed for G. And J. Robinson, 1803. Reprint New Delhi Reprint: Asian Educational Services.

- Grose, John Henry. (1772): *A Voyage to the East Indies. Containing authentic accounts of the Mogul government in general, the viceroyalties of the Decan and Bengal, with their several subordinate dependances ... With general reflections on the trade of India, A new edition ... with views and ... plans. To which is added a Journey from Aleppo to Busserah, over the Desert, by Mr. Charmichael.* Vol.I & II. London: printed for S. Hooper, at no. 25, Ludgate Hill.
- Hamilton, Alexander. (1995): *A New Account of the East-Indies. Being the Observations and Remarks of Alexander Hamilton from the years 1688 to 1723.* Vol. II. London: Printed for A. Bettesworth and C. Hitch, 1739. Reprint New Delhi: Asian Educational Services.
- Hamilton, Walter. (1828): *The East India Gazetteer; containing particular descriptions of ... Hindostan, and the adjacent countries, India beyond the Ganges, and the Eastern Archipelago: with sketches of the manners ... of their various inhabitants.* (1<sup>st</sup> ed. 1815). London: Printed for Parbury, Allen, and Co.
- Hammond, Lincoln Davis. (1963): *Travelers in Disguise: Narratives of Eastern Travel by Poggio Bracciolini and Ludovico de Varthema*, trans. John Winter Jones, revised with introduction by Lincoln Davis Hammond. Cambridge MA: Harvard University Press.
- Hardwicke, Captain Thomas. (1801): 'Narrative of a Journey to Sirinagur'. *Asiatick Researches.* 6: 309–47.
- Hodges, William. (1794): *Travels in India, during the years 1780, 1781, 1782, and 1783.* London: Printed for the author.
- Hulme, Peter and Tim Youngs. eds. (2002): *The Cambridge Companion to Travel Writing.* Cambridge: Cambridge University Press.
- Hunter, W. W. (1965): *The Annals of Rural Bengal.* rp. Calcutta: India Studies, Past & Present.
- Keighren, Innes M., Charles W. J. Withers, and Bill Bell. (2015): *Travels into Print: Exploration, Writing, and Publishing with John Murray, 1773–1859.* Chicago and London: University of Chicago Press.
- Kohn, Meir. (2003): 'Organized Markets in Pre-Industrial Europe'. Working Paper 03–12. draft chapter of *The Origins of Western Economic Success: Commerce, Finance, and Government in Pre-Industrial Europe.*
- Kolff, Dirk H. A. (1971): 'Sannyasi Trader-Soldiers'. *Indian Economic and Social History Review.* 8. 2: 213–18.
- . (1990): *Naukar, Rajput and Sepoy: The Ethnohistory of the Military Labour Market in Hindustan. 1450–1850.* Cambridge: Cambridge University Press.
- Kulke, Hermann. (1978): 'The Struggle between the Rajas of Khurda and the Muslim Subahdars of Cuttack for Dominance of the Jagannatha Temple'. in eds. A. Eschmann, Hermann Kulke, and Gaya Charan Tripathi. *The Cult of Jagannath and the Regional Tradition of Orissa.* 321–42. New Delhi: Manohar.
- Leckie, Daniel Robinson. (1800): *Journal of a Route to Nagpore, by way of Cuttae, Burrosumber, and the Southern Bunjare Ghaut, in the Year 1790.* London: John Stockdale.
- Linschoten, John Huyghen van. (1997): *The Voyage of John Huyghen Van Linschoten to the East Indies.* Eds. Arthur Coke Burnell & P. A. Tiele. Vol. I. London: Printed for the Hakluyt Society, 1935, New Delhi: Munshiram Manoharlal Publishers Pvt. Ltd.
- Malcom, Howard. (1840): *Travels in Hindustan and China.* Edinburgh: William and Robert Chambers.
- Mandelslo, John. (1669): 'Travels into the Indies', in *The Voyages and Travells of the Ambassador*

sent by Frederick Duke of Holstein, to the Great Duke of Muscovy and the King Persia. Begun in the year M.DC.XXXIII, and finished in M.DC.XXXIX. containing of a Compleat History of Muscovy, Tartary, Persia. and other adjacent countries. whereto are added The Travels of John Albert de Mandelslo, (a Gentleman belonging to the Embassay ) from Persia, into the East-Indies. Containing A particular Description of Indosthan, the Mogul's Empire, the Oriental Islands, Japan, China, & and the Revolutions which happened in those Countries, within these few years. London: Printed for John Starkey, and Thomas Basset.

- Markley, Robert. (2007): 'Monsoon Cultures: Climate and Acculturation in Alexander Hamilton's A New Account of the East Indies'. *New Literary History*. 38.3: 527–50.
- Marshall, John. (1927): *John Marshall in India – Notes and Observations in Bengal (1668–1672)*. Ed. Shafaat Ahmad Khan. Oxford London: Humphrey Milford.
- Michell, George, ed. (1983): *Brick Temples of Bengal from the Archives of David McCutcheon*. Princeton: Princeton University Press.
- Mitra, Ashoke, ed. (1968): compiled by Arun Kumar Roy. *Paschim Banger Puja-Parban o Mela*. Vols. I-III. Delhi: Government of India.
- Moore, Ellen Wedemeyer. (1985): *The Fairs of Medieval England. An Introductory Study*. Toronto: Pontifical Institute of Mediaeval Studies.
- Mukherjee, Tilottama. (2013): *Political Culture and Economy in eighteenth-century Bengal. Networks of Exchange, Consumption and Communication*. Delhi: Orient Blackswan.
- Munro, John. (2001): 'The 'New Institutional Economics' and the Changing Fortunes of Fairs in Medieval and Early Modern Europe: the Textile Trades, Warfare, and Transaction Costs'. In *Fieri e mercati nella integrazione delle economie europee, secoli XIII – XVIII*. Atti delle "Settimana di Studi" e altri convegni. No. 32. Istituto Internazionale di Storia Economica F. Datini. 32. 1: 405–51.
- Nanda, Vivek, and Alexander Johnson. (2015): *Cosmology to Cartography. A Cultural Journeys of Indian Maps from the collections of Kalakriti Archives, Hyderabad and National Museum*. New Delhi: National Museum.
- Nayar, Pramod K. (2003): 'The "Discourse of Difficulty": English Writing and India, 1600–1720'. *Prose Studies*. 26.3: 357–94.
- . (2005): 'Marvelous Excesses: English Travel Writing and India, 1608–1727'. *Journal of British Studies*. 44: 213–38.
- Peggs, James. nd: 'Pilgrim Tax in India. Facts and Observations Relative to the Practice of Taxing Pilgrims in Some Parts of India'. London: Seely and Son; Wightman and Cramp; and Mason. Serampore Carey Library and Research Centre 080 Pam. 19, No. 42.
- Pennant, Thomas. (1798): *The View of Hindoostan*. Vols. I-II. London: Printed by H. Hughs.
- . (1798–1800): *Outlines of the Globe*. Vols. I-II. London: Printed by Henry Hughs.
- Phillips, Kim M. (2014): *Before Orientalism: Asian Peoples and Cultures in European Travel Writing, 1245–1510*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Pinch, William R. (1996): *Peasants and Monks in British India*. Berkeley: University of California Press.
- . (1998): 'Who was Himmat Bahadur? Gosains, Rajputs, and the British in Bundelkhand, ca. 1800'. *Indian Economic and Social History Review*. 35.3: 293–335.
- . (2006): *Warrior Ascetics and Indian Empires*. New Delhi: Cambridge University Press/Foundation Books Pvt. Ltd.
- Pires, Tomé. (2005): *The Suma Oriental of Tom Pires. An account of the East, from the Red Sea*

- to China, written in Malacca and India in 1512–1515 and the Book of Francisco Rodrigues. Vol. I. Ed. Armando Cortesao. Reprint New Delhi, Chennai: Asian Educational Services.
- Prior, Katherine. (1990): 'The British Administration of Hinduism in North India, 1780–1900'. Ph.D. thesis, University of Cambridge.
- Raj, Kapil. (2000): 'Colonial Encounters and the Forging of New Knowledge and National Identities: Great Britain and India, 1760–1850'. *Osiris*. 15: 119–34.
- . (2010): 'Circulation and the Emergence of Modern Mapping: Great Britain and Early Colonial India, 1764–1820' in *Relocating Modern Science Circulation and the Construction of Knowledge in South Asia and Europe, 1650–1900*. Palgrave Macmillan.
- . (2011): 'The Historical Anatomy of a Contact Zone: Calcutta in the Eighteenth Century'. *Indian Economic and Social History Review*. 48.1: 55–82.
- Raja Prithvichandra of Pakur. (1971): *Gauri Mangala*. ed. Bimanbehari Majumdar, with a Brief History of the Pakur Raj by Kalinkar Dutta. Calcutta: Asiatic Society.
- Ray, Aniruddha. (2015): *Towns and Cities of Medieval India: A Brief Survey*. New Delhi: Manohar.
- Richards, John F. (1997): 'Early Modern India and World History'. *Journal of World History*. 8.2: 197–209.
- Risla-i-Zirat*. (1993): Harbans Mukhia ed. *Perspectives on Medieval History*. Delhi: Vikas Publishing House.
- Riyazu-s-Salatin* of Ghulam Hussain Salim. (1975). English trans. Abdus Salam. rp. Delhi: Idarah-i Adabiyat-i Delli.
- Rubiés, Joan-Pau. (2000): *Travel and Ethnology in the Renaissance. South India through European Eyes, 1250–1625*. Cambridge: Cambridge University Press.
- . (2006): 'Travel Writing and Humanistic Culture: A Blunted Impact?'. *Journal of Early Modern History*. 10. 1–2: 131–68.
- Schendel, Willem van, ed. (1992): *Francis Buchanan in Southeast Bengal (1798): His Journey to Chittagong, the Chittagong Hill Tracts, Noakhali and Comilla*. New Delhi: Manohar.
- Schouten, Gautier. (1707): *Voyage de Gautier Schouten aux Indes Orientales, Commencé l'an 1658 et fini l'an 1665*. trans. from Dutch. Tome I, II. Amsterdam: Aux dépens d'Estienne Roger Marchand Libraire.
- Sen, Bijayarama. (1915–16): *Tirtha Mangala*. Calcutta: s.n.
- Sen, Ranjit. (1988): *Social Banditry in Bengal: A Study in Primary Resistance 1757–1793*. Calcutta: Ratna Prakashan.
- Sen, Sudipta. (1994): 'Conquest of Marketplaces: Exchange, Authority and Conflict in Early Colonial North India'. Ph.D. University of Chicago.
- Sen, Surendranath. ed. (2011): *Indian Travels of Thevenot and Careri: Being the third part of the travels of Jean de Thevenot into the Levant and the third part of a voyage round the world by John Francis Gemelli Careri*. rp. New Delhi: Asian Educational Services.
- Sharma, Yogesh and Pius Malekandathil. eds. (2014): *Cities in Medieval India*. Delhi: Primus Books.
- Shaw, Graham. (1981): *Printing in Calcutta to 1800: A Description and Checklist of Printing in Late 18th-Century Calcutta*. London: Bibliographical Society; New York: Oxford University Press.
- Sherman, William H. (2002): 'Stirrings and Searchings (1500–1720)'. in *The Cambridge Companion to Travel Writing*. Eds. Peter Hulme, and Tim Youngs. Cambridge: Cambridge

University Press.

- Sketches of India; or, Observations Descriptive of the Scenery, &c. in Bengal, With notes on the Cape of Good-Hope and St. Helena.* 1816: London: Printed for Black, Parbury and Allen, booksellers.
- Stavorinus, J. S. (1798): *Voyages to the East Indies.* trans. Samuel Hull Wilcocke. London: Printed for G. G. and J. Robinson.
- Subrahmanyam, Sanjay. (2001): *Penumbra Visions - Making Politics in Early Modern South India.* Ann Arbor: University of Michigan Press.
- Symson, W. (1715): *A New Voyage to the East Indies... to which is added, a particular account of the French factories in those parts, and of the general Trade throughout all India. With many excellent remarks by the Sieur Luillier.* London: Printed and sold by J. Wilford.
- Tavernier, Jean-Baptiste. (2007): *Travels in India.* eds. and trans. V. Ball and William Crooke. Vols. I, II. (bound in 1) rp. Delhi: Low Price Publications.
- Taylor, James. (1840): *A Sketch of the Topography and Statistics of Dacca.* Calcutta: G. H. Huttman, Military Orphan Press.
- Teltscher, Kate. (1995): *India Inscribed: European and British Writing on India, 1600–1800,* Delhi: Oxford University Press.
- Thenon, A. nd: *À Travers L'Inde,* Paris: Théodore Lefèvre.
- Trevelyan, Charles E. (1976): *Report upon the Inland Customs and Town Duties of the Bengal Presidency.* ed. T. Banerjee. rp. Calcutta: Academic Publishers.
- Twining, Thomas. (1893): *Travels in India a Hundred Years Ago with a Visit to the US.* London: J. R. Osgood, McIlvaine & Co.
- Vaporis, Constantine Nomikos. (1994): *Breaking Barriers, Travel and the State in Early Modern Japan.* Cambridge (Massachusetts): Council on East Asian Studies, Harvard University.
- Varthema, Ludovico di. (1863): *Travels of Ludovico di Varthema, in Egypt, Syria, Arabia Deserta and Arabia in Persia, India, and Ethiopia, A.D. 1503 to 1508.* trans. from original Italian edition of 1510, with a preface by John Winter Jones, with notes and an introduction by George Percy Badger. London: Printed for Hakluyt Society.
- Vidyarthi, L. P. (1991): 'Gaya Priests and their Social Networks'. in ed. T. N. Madan. *Religion in India.* 308–19. Delhi: Oxford University Press.
- Webb, Diana. (1999): *Pilgrims and Pilgrimage in the Medieval West.* London, New York: I. B. Tauris.
- . (2002): *Medieval European Pilgrimage c.700-c.1500.* London: Palgrave Macmillan.
- Wittkower, Rudolf. (1942): 'Marvels of the East. A Study in the History of Monsters'. *Journal of the Warburg and Courtauld Institutes.* 5: 159–97.
- Yang, Anand A. (1998): *Bazaar India - Markets, Society, and the Colonial State in Gangetic Bihar.* Berkeley, London: University of California Press.
- Zacher, Christian K. (1976): *Curiosity and Pilgrimage: The Literature of Discovery in Fourteenth-century England.* Baltimore, London: Johns Hopkins University Press.

<略記・史料>

AAS (Asian & African Studies, British Library, London), Bengal Revenue Consultations

AAS, Bengal Revenue Separate-Dept. (-Revenue Letter from Bengal)

AAS, Bengal Sudder Dewanny Adawlut

AAS, Mss. Eur. F 95 (Kyd)

AAS, Orme Mss. OV  
AAS, PDP (Prints Drawings & Photographs), Add. Or. 3228,  
CSSSC (Centre for Studies in Social Sciences, Calcutta), Mss. Eur. 74 & D 75  
NAI (National Archives of India, New Delhi), BPC (Bengal Public Consultations)  
NAI, Foreign Political  
NAI, Home Public (Home Department, Public Branch)  
NAI, Provincial Council of Revenue Dinajpur  
WBSA (West Bengal State Archives, Kolkata), BOR-Sayer (Board of Revenue-Sayer)  
WBSA, BOT-Comm (Board of Trade-Commercial)  
WBSA, CCR (Calcutta Committee of Revenue)  
WBSA, Committee of Revenue  
WBSA, Revenue Dept. - Sayer, O.C. (original consultations)

要旨: 16 世紀から 18 世紀にかけて多数のヨーロッパ人旅行者がベンガルを訪れ、同地域の都市やその経済的・政治的盛衰について貴重な報告を残している。旅行記は、初期には記述が貧弱であったが、ガンガー沿いの諸都市、ヨーロッパ各国東インド会社間の競争、そして増大するカルカッタの重要性についての報告を含む、より詳細なものになっていった。現地の人々は旅に出てもそれについてまったく記録を残さなかったが、その旅自体はベンガル経済には多大な影響を与えた。本稿は、外国人による旅行記を通じて都市や経済活動の変容を明らかにした上で、巡礼と定期市の分析から旅の経済的帰結について描きだすことを試みる。

キーワード: 近世ベンガル, ヨーロッパ人旅行者, 市場, 巡礼, 旅行記